



[目次]

日本生態学会各賞候補者募集 1
第60回日本生態学会大会案内 4
日本生態学会大津大会レポート 9

記 事

I. 59回大会総会、全国委員会、各種委員会報告承認決議事項..... 13
 A. 報告事項
 B. 承認事項
 C. 決議事項
II. 第59回日本生態学会大会記録..... 25
III. 書評依頼図書..... 28
IV. 寄贈図書 29
V. 交換雑誌目録..... 29

お知らせ

1. 公募..... 30

書評..... 30

公募カレンダー..... 35

日本生態学会役員一覧..... 36

京都大学生態学研究センターニュース..... 39

日本生態学会各賞候補者募集

第11回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第17回「日本生態学会宮地賞」

生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第6回「日本生態学会大島賞」

例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第1回「日本生態学会奨励賞」*本年新設

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から若干名の受賞者を選考し、「日本生態学会鈴木基金」から各々5万円の賞金が贈呈されます。

（賞設置の経緯、細則については生態学会ウェブサイトにてご確認ください。）

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<http://www.esj.ne.jp/>) よりダウンロード
3. 送付先：〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)
4. 締め切り日：2012年8月15日（必着）

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は全国委員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をす

る。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。

第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会大島賞細則

第1条 日本生態学会大島賞（以下大島賞という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や会員歴にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本学会の学会誌に投稿する。

第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

第 60 回日本生態学会大会案内

第 60 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ60）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 422-8529 静岡市駿河区大谷 836 静岡大学教育学部
第 60 回日本生態学会大会（ESJ60）実行委員会
担当：増澤武弘（大会会長）、小南陽亮（大会実行委員長）
大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/60/>
本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。
大会に関する最新情報は、大会公式ホームページで確認してください。

会場・日程

本大会は静岡県コンベンションアーツセンター(グランシップ)を会場として 2013 年 3 月 5 日(火)から 9 日(土)に開かれます。

日程等の詳細は次号のニュースレターでお知らせします。

〒 422-8005 静岡県静岡市駿河区池田 79-4 静岡県コンベンションアーツセンター

URL: <http://www.granship.or.jp/parking/index.html>

大会の概要

本大会では、シンポジウム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、フォーラム、自由集会、高校生ポスター発表会、総会、受賞講演会、懇親会、公開講演会を行います。シンポジウム、企画集会、自由集会の開催形式につきましては、「ESJ60 シンポジウムの企画案の公募」と「ESJ60 企画集会と自由集会」をご覧ください。

本大会は、日本生態学会会員ではない方も参加できます。ただし、本大会で講演・企画できるのは、日本生態学会の会員に限ります（招待講演者、高校生ポスター発表会の講演者等を除く）。参加資格の詳細については、5 ページの大会参加資格一覧をご覧ください。

非会員が講演・企画を希望される場合は、2012 年 10 月 19 日までに 2013 年の入会を申し込むとともに、10 月 24 日までに 2013 年学会費を納入して学会員となる必要がありますのでご注意ください（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様）。

入会手続きについては <http://www.esj.ne.jp/office/member/index.html> を参照してください。

また、大会に参加するには、期日までに大会参加費を支払い、「大会規則」、「注意事項」等大会運営に関わる諸規定を遵守する必要があります。なお、学会費と大会参加費は異なります。混同しないようご注意ください。

公開講演会

日本生態学会第 16 回公開講演会を以下の要領で開催する予定です。

- ・講演会タイトル：「世界遺産における自然の恵みとその保全」
 - ・日時： 2013 年 3 月 9 日（土）13:00～16:30
 - ・会場： 静岡県コンベンションアーツセンター（グランシップ）
- 内容の詳細については、次号のニュースレターで掲載いたします。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。なお講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別 \ 会員種別	A/B 会員	C 会員	非会員
一般講演（口頭・ポスター）	○		
シンポジウム企画	○		
シンポジウム講演	○	○	○ *1
企画集会企画	○	○	
企画集会講演	○	○ *2	○ *2
自由集会企画	○	○	

*1 実行委員会の判断により、招待講演者として大会参加費を免除することがあります（懇親会費は各自負担）。

*2 実行委員会が特別に認めた場合に限りです。

*3 自由集会のみに聴衆として参加する場合は大会参加費不要です。

・高校生ポスター発表会については次号のニューズレターで詳細を掲載します。

・シンポジウム、企画集会等のコメンテータは学会員である必要はありません。

・聴衆として参加する場合は、学会員である必要はありません。

提案、申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切り予定は以下の通りです。シンポジウム企画提案は2012年6月6日（水）から受け付けます。他の申し込み開始は、締め切りの1ヶ月程度前から受付ける予定です。これらのスケジュールに変更がある場合もありますので、適宜、大会ホームページで確認してください。

シンポジウムの企画提案	2012年 7月 12日（木） 17:00
企画集会申し込み	2012年 11月 8日（木） 17:00
自由集会申し込み	2012年 11月 8日（木） 17:00
一般講演申し込み	2012年 11月 8日（木） 17:00
講演要旨登録	2013年 1月 7日（月） 17:00
一般講演口頭発表用ファイルの登録	大会の数日前

新規に入会する講演者・企画者の入会申し込み	2012年 10月 19日（金） 17:00
新規に入会する講演者・企画者の2013年学会費入金	2012年 10月 24日（水） 入金分

すべての締切に関して、締切後の追加、修正等の依頼には対応できませんのでご注意ください。

シンポジウムの企画案の公募

第60回大会では、前回大会と同じ要領で、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

- ・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。
- ・企画案は講演者が決まっていない Seeds 段階のものでもかまいません。
- ・海外研究者の招聘のリクエストも歓迎します。招聘費用を大会費用からまかなうことが出来る場合があります。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。
- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には**企画者（オーガナイザー）**としての参加を要請します。企画者は日本生態学会 A 会員と B 会員に限り、日本生態学会 C 会員および非会員は企画者（企画の責任者および連名の共同企画

者を含む) になれません。

- ・大会企画委員会はコーディネータを出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません(「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様)。企画段階で重複が認められる場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は企画集会の企画者・講演者になることはできません。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は一般講演(口頭発表、ポスター発表とも)の講演者にもなれません。
- ・シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。
- ・大会シンポジウムの企画は、2012年7月12日(木)17:00までに大会公式ホームページからご提案下さい。

企画集会と自由集会

第60回大会では、企画集会と自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

企画集会

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者となることはできません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演(口頭発表、ポスター発表とも)の講演者(講演の主たる説明者)にもなれません。
- ・企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会(企画集会・自由集会)の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。

自由集会

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。
- ・限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮いただきます。二つ以上の自由集会の企画・講演も可能なかぎりご遠慮いただきます。
- ・提案された自由集会の数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会(自由集会・企画集会)の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。

企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会会員(A、B、C会員のいずれか)である必要があります。さらに、企画集会での講演者(主たる説明者)はA/B会員に限定されます(大会実行委員会が特別に認めた場合を除く)。

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2012年11月8日(木)17:00までに大会公式ホームページからお申し込みください。

企画集会については、集会の提案・概要登録時に、講演者(主たる説明者及び共同発表者)と講演タイトルもあわせて登録します。また、企画集会・自由集会の企画者、および企画集会の講演者(主たる説明者)は、集会提案時まで大会への参加登録を済ませて登録番号を取得しておく必要があります。これらの締め切りはすべて11月8日(木)17:00です。ご注意ください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。

開催の可否については、11月15日(木)までにメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません
開催時間	約3時間	約2時間	約2時間
開催の優先度	最優先されます	シンポジウムの次に優先されます（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられ、同時開催集会在少なくなるよう考慮されます）	シンポジウムの次に優先されます	優先されません（夕方や初日等、聴衆の集まりにくい日時に割り当てられ、多くの同時開催集会有ります）
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネーターとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります	特定の個人を誹謗中傷する内容がないかなど最低限の事項のみを審査します	特定の個人を誹謗中傷する内容がないかなど最低限の事項のみを審査します
企画者の資格	A/B 会員	A/B/C 会員	A/B/C 会員
C 会員および非会員による講演	奨励します（実行委員会の判断により、非会員講演者・コメンテーターを招待講演者として、大会参加費免除で大会に招待することがあります）	原則として認められません	認められます（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）
海外からの招待講演者への学会からの旅費支給	1 件程度認められます	なし	なし
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会和の重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能	自由集会・フォーラムのみ可能	全て可能
提案締切日	7/12（木）	11/8（木）	11/8（木）
概要登録 / 集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	11/8（木）	11/8（木）	11/8（木）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます	集会概要のみ掲載されます

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、**重複発表制限の対象となりません**。

一般講演

一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りを行いますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。ESJ60における発表募集時の分野の区分については、現在、企画委員会で検討しており、決定次第ホームページ

でお知らせしますので適宜ホームページでご確認ください。なお、応募状況に応じて募集時の区分は統廃合されますので、大会開催時の分野区分は募集時のそれと異なる可能性があります。予めご了承ください。

注意：

- ・一般講演の演者は、日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
C 会員は一般講演の講演者（講演の主たる説明者）にはなれません。
- ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムおよび企画集会の**企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）**。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承ください。

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」は、第 60 回静岡大会から正式企画（大会企画委員会の下に高校生ポスター部会が発足）として開催することになりました。生態学の社会への普及のため、日本生態学会によるアウトリーチ活動の一環として企画します。

高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をもっていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。参加費は無料です。

開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニュースレター／日本生態学会公式 HP / 全国規模の ML 等で配信しますので、ぜひお知り合いの高校教員や高校生に周知していただきますよう、よろしく願います。

60 周年記念シンポジウム

第 60 回大会では、生態学会発足 60 周年を記念したシンポジウムを実施いたします。詳細は次号のニュースレターに掲載する予定です。

ポスター賞

若手の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載する予定です。

諸経費と納入方法

大会参加費、懇親会費などはこれまでの大会に準じた設定とする見込みです。
諸経費の納入方法については、次号のニュースレターで詳しくお知らせします。

エコカップ 2013

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ 2013 が行われます。主催はエコカップ 2013 実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

日本生態学会大津大会レポート

—東アジア生態学会連合大会との合同大会の運営—

榎木 勉 (大会企画委員会前委員長)

第59回日本生態学会大津大会 (ESJ59) は第5回東アジア生態学会連合大会 (EAFES5) との合同大会として開催されました。約2500名という多くの方にご参加いただき、非常に活気ある大会となりました。EAFES5のシンポジウムや式典も盛況で合同大会は成功裏に終えることができました。これも参加者の皆さんのご理解とご協力によるものです。大会企画委員会を代表して御礼申し上げます。また、この大規模な大会を現地で周到に準備し、当日の運営から開催後の様々な対応までを円滑に行なっていただいた大会実行委員会の皆さんのご尽力に感謝申し上げます。EAFESに関する様々な国際的な要件の対応にはEAFES実行委員会の皆さんに引き受けて頂きました。大会実行委員会の皆さんとの適切な役割分担と連携により合同大会の開催が可能なものとなりました。ありがとうございました。

今期の大会企画委員が集まり、大津大会の準備を本格的に開始したのは一年前の札幌での大会企画委員会からでした。札幌大会開催期間中に発生し、多くの方が被災された東日本大震災の影響は未だ大きなものがあります。一日も早い復興を心よりお祈りいたします。一年が経過した大津大会では、震災による困難を乗り越えてまとめられた研究成果の発表や、生態学の災害への対応や生態学の震災復興への貢献を主題とした集会の開催もありました。生態学、生態学会の役割や使命を実感する大会でもあったと思います。

大規模な大会の運営

大津大会は日本生態学会としては、6年前の新潟大会以来、2度目のEAFESとの合同大会でした。日本生態学会大会の運営方式が大きく変わり、開催地の地元で組織される大会実行委員会と学会に常設される企画委員会との連携体制で運営するようになったのも新潟大会からでした。それまでは開催地の地区会員で組織する実行委員会が、大会業務全てを担当していました。しかし、年々拡大する大会規模に対し、実行委員会の負担が大きくなりすぎ、運営が困難になっていましたので、特に現地で行う必要がない業務は大会企画委員会が担当することになりました。

多くの方が実感されていると思いますが、新潟大会以降の6年間においても、生態学会の大会規模は拡大しています。55回福岡大会では一般講演が1000件を越え、56回盛岡大会では参加者が2000名を越えました。57回東京大会では参加者数が2500名を越えたとされ、ニュースレター21号に掲載された東京大会レポートでは「史上空前規模」と表現されました。東京で開催されると参加者が2割増しになるとも言われていましたが、その後、この規模は開催地が札幌、大津に移っても同程度に維持されています。大津大会では、この原稿執筆時の集

計で、総参加者数が2456人、一般講演が1467件(口頭発表277件、ポスター発表1130件)、公式集会数が51件(ESJシンポジウム10件、EAFESシンポジウム11件、EAFES特別シンポジウム5件、フォーラム5件、企画集会20件)、非公式集会である自由集会が32件、高校生ポスター発表が35件と、合同大会ではありますが、規模としては東京大会を上回っていたと言えるでしょう。

このような大会規模の拡大の背景の一つには、会員に可能な限り研究発表の場を提供するという生態学会の理念があります。企画委員会でも、基本的には希望した全員が講演できるようにしています。しかし、時間と場所は限られていますので、幾つかの制約を設ける必要があります。また、この制約によって一部の人が不利益を被らないよう、平等性を確保する必要があります。このような条件をみとすことを基本方針とした上で、生態学会ではボランティアベースで大会を運営しています。運営の外部委託という選択肢も常に議論されていますが、外部委託のためには予算を確保する必要があります。経済的な後援が比較的少ない生態学会では、外部委託のための予算を確保するには大会参加費を増加させる必要がありますが、現時点では参加費増加は避けると判断しています。大津大会では、運営の一部を外部委託し、大部分は大会実行委員会と大会企画委員会の連携で行いました。ボランティアベースでは、担当して下さる方々の負担を下げるためにも運営の省力化が必然となります。大会企画委員会では、オンラインシステムの充実化など運営効率を上げる努力を何年にもわたり進めています。しかし、大会がおかれている状況は年々変化しますし、これまで気づかなかった不具合に気づくこともあります。

大津大会は、EAFESとの合同大会として開催されることが決まっており、多くの困難が予測されていました。大会実行委員会と大会企画委員会は、様々な想定をした上で準備に入りましたが、大会企画委員長の読みの甘さや対応能力のなさを実感することが多々あり、大会に参加される皆さんにはご迷惑やご不便をおかけしたこともありました。このレポートをお読みいただくことで、その事情のいくらかをご理解いただければ幸いです。

大会でのポスター発表数は東京大会以降も増加し続けています。大津大会ではポスター発表の申込者数がポスター掲示可能な枚数を上回り、多くの方に口頭発表に移動して頂くことになりました。最終的には、ポスター発表は一般のポスターが1130件、これに高校生ポスターの35件が加わる形で実施されました。大会実行委員会には会場の選定にあたり、前年と同程度かそれをやや上回る数のポスターが掲示できるポスター会場を確保していただいています。大津大会ではポスター発表希望者は予想を上回ってしまいました。講演申し込み時点では、

すでに会場の大きさとポスターの掲示時間は変更できない状態にありますので、掲示可能なポスター数を増やすためには、ポスターの間隔を詰めるほかありません。しかし、狭い会場に多くのポスターを掲示することは、発表や質疑応答に支障をきたすのみでなく、安全管理上の問題もあります。災害発生時の避難方法なども合わせて検討いたしますと今大会ではこれ以上のポスターの詰め込みは不可と判断いたしました。ポスター発表の希望にお答え出来なかった皆さんにはこの様な事情をご理解していただきたいと思います。

大津大会でポスター発表希望者が急増した理由の一つには EAFES5 との合同大会であったことが考えられますが、次大会以降も相当数のポスター発表の申込があると思われれます。ポスター発表希望者数が掲示可能枚数を上回った場合、今後も大津大会の様に口頭発表への移動をお願いするかどうかは検討しておく必要があります。ポスター会場のスペースが確定されれば、一度に掲示できるポスター数も決まります。発表希望者が掲示可能な枚数を越えると予想されれば、ポスターの掲示時間を短くし午前と午後で掲示ポスターを入れ替える一日二部制にするということも考えられます。しかし、二部制とした場合、コアタイムを口頭発表やシンポジウム開催時間を避けて設定するのはかなり難しいでしょう。あらかじめ抽選を行うなどしてポスターの枚数を制限することも考えないといけないかもしれません。

口頭発表は、ポスター発表から移動していただいたこともあり、ここ数年では最も多い数となりました。ただし、ポスター発表と比較すると、おおよそ四分の一であり、この数字は、新潟大会以降わずかず減少しています。口頭発表とポスター発表のどちらにもそれぞれの利点がありますが、発表数で言えばポスター発表の人气が高い状態が続いています。これにはポスター賞の影響が大きいと思われれます。口頭発表を盛り上げるためには、口頭発表にも賞を設置すればという案も検討されていますが、審査方法をどうするかなど課題は沢山あります。もとより大会における口頭発表とポスター発表のありかたについても検討しておく必要があります。

ポスター賞が研究活動の励みになっているという声をうかがうことは多々あります。大会を運営する側にとっては大変ありがたいお言葉です。一方で、ポスター賞の運営には多岐に渡る準備が必要です。ポスター部会がこの役割を担うのですが、中でも審査員の確保は毎回心配することの一つです。大津大会では 174 名の方に審査員となっていただきました。ご協力ありがとうございました。今回は試行として英語で作成したポスターのみをポスター賞の対象としました。また EAFES5 との合同ポスター賞としたこともあり、審査基準もそれに合わせて変更することにもなりました。この合同ポスター賞については「大会の国際化」のところでもう少し述べます。

大津大会では公式集会と非公式集会を合わせて 83 件の集会が開催されました。これは盛岡大会の 87 件について過去二番目に多い数です。様々な集会が数多く企画されることは学会の活性の高さを示していると思えます。また、どの会場にも多くの聴衆がみられ、企画のす

ばらしさや大会参加者の積極性を感じました。一方で、企画される集会数の増加にともなう問題もあります。開催される集会の数が増えれば、参加する集会の選択肢が増えますが、参加したい集会が同時に開催される確率も増えます。また、生態学会の大会は開催期間が長い、一日だけを見ても朝から晩まで長い、という言葉を目にすることがありますが、大会では各種研究会の他に一般講演（口頭発表とポスター発表）があり、加えて総会、受賞記念講演、各種委員会などもあります。大会企画委員会、大会実行委員会では、可能な限り多くの研究発表の場を皆さんに提供できるように、会場の使い方を大会ごとに検討しています。ご理解をお願いいたします。また、参加者の皆さんに平等に発表の機会を提供するために、発表の重複講演を制限させていただいています。これは限られた場所と時間を分け合うための制限です。ご協力もお願いいたします。

その他にも大会運営には制約を設けています。「締め切り厳守をお願いする理由 (http://www.esj.ne.jp/meeting/info/why_so_inflexible.html)」につきましては、多くの皆さんにご理解をいただき、大津大会の運営においても多大なご協力をいただきました。一方、「どうしてこんなに融通が効かないのか」、「もっと規模の大きな大会でも何とかなるのに」というようなという声もあります。この融通の効かなさについては、公平さを確保した大会運営をボランティアベースで実現するためのものですが、それらの声や大会企画委員、実行委員の経験などから、より皆さんに納得していただける運営方法を模索し、年々改訂が加えられています。より良い大会運営のために有益な情報や建設的なご意見をお寄せ頂きますようお願いいたします。

大会の国際化

生態学会では大会の国際化を推進しています。将来計画委員会からの「日本の大学院生たちが、一人前の研究者となるには英語による研究成果の発表、討論、共同研究を遂行する能力が必要である」という指摘を受け、大会の講演時の英語の利用を推奨してきました。この数年、口頭発表においては、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎しています。国際学会との合同大会である大津大会では、国際化推進のためのいくつかの措置を講じました。その一つが、英語で作成されたポスターのみをポスター賞の対象としたことです。この決定までの議論には様々な意見がありました。明らかに日本語話者しかいない場所で日本語を禁じることは議論を深めるためには無駄ではないか、という意見もありました。実際、当日ポスターの前で思ったより議論が進まなかったという声も聞きました。一方で、ポスターの前で日本語でのみ質疑応答がなされている状況では、非日本語話者が議論に加わりにくいのではないかなど意見もありました。英語での質疑応答に抵抗を持たない人、多少の不便は感じながらも英語のみの利用を支持する人もおられました。ポスター賞応募についての使用言語の制限は大津大会のみでの試行でした。次回静岡大会では

一旦従来の形に戻します。大津大会でのポスター賞運営のあり方については、会員の皆さんからのご意見を伺うべく、将来計画委員会によってアンケートが実施されました。たいへん多くの回答を得たアンケート結果は現在集計中です。この結果も考慮し、今後のポスター賞の運営を検討します。

ポスター賞以外にも大会の国際化や EAFES との合同大会の是非についてはみなさんの考えを伺いたいと思います。各種集会を企画していただいた方々にお願ひしたアンケートでは、まだ詳細な分析はおこなっていませんが、海外からの参加者がほとんどいなかったシンポジウムや企画集会がかなりあったようです。その理由は様々だと思いますが、海外からの参加者を増やすためには、投影資料やポスターに英語を併記したり使用言語を英語にしただけでは済まない運営上の問題が多々あります。会員登録、大会参加登録、参加費の支払い方法などの準備段階においても各国の諸事情を考慮する必要があります。大会当日においても会場係を含めた案内の整備など多くの対応が必要になります。

合同大会の運営

大津大会で最も苦慮したことは EAFES5 と合同大会として運営することでした。大会の国際化とは別にこのことについて述べておきたいと思います。大津大会にむけての大会企画委員会が具体的な準備を本格的に開始した一年前の段階では、ESJ59 と EAFES5 を合同で行うことが決まっていた。これは同じ場所で同時に2つの大会を実施することが決まっていたということです。国際大会との合同大会では外国からの研究者と交流する機会が増えます。また、双方の大会に参加者の増加など相乗的な効果も起こりうると考えられます。実際、大津大会では多くの後援、多くの参加者がありました。合同大会開催に向けて、まず大きな方針を検討しました。例えば、EAFES5 と ESJ59 を完全に一つの国際学会として両者の区別がないような運営も考えられました。この場合、大会案内や申し込み手続きから始まるあらゆる場面で使用する言語を英語にする（自由集会は公式行事ではないので除く）こととなります。ほかにも、ESJ59 の部分はこれまでどおり大会実行委員会と大会企画委員会が運営し、EAFES5 の部分は別の組織で運営するという方法も考えられました。その他にもいろいろな選択肢があるのですが、それぞれにメリット・デメリットがあります。最終的には今回開催された形になりました。EAFES5 と ESJ59 は区別されるが、ポスター発表は合同で実施する、ただし ESJ59 としてのポスター発表もある、などです。この部分だけをみても大津大会の構造の複雑さを感じます。

実際、従来の大会運営システムの拡張を合同大会に対応させるために手探りで準備を進めていました。特に、EAFES5 の方針は EAFES 参加国の意向と照らし合わせながら決められました。一年間でこのようなことを全て行うのはかなり無理があったと思います。例えば、EAFES5 の講演はシンポジウムとポスター発表のみとすることが決まりました。シンポジウムの企画において生

態学会大会ではコーディネーター制をとっていますが、EAFES のシンポジウムはどうするか、ポスター賞はどうするかなどは、その後決めることになります。その他にも登録方法、会員資格のチェックなどの作業があります。これまで日本生態学会大会では優れたオンラインシステムと各部会の機能的な役割分担と連携が大会企画委員会によるボランティアベースの運営を支えてきましたが、今回の合同大会への対応にはいくつかの困難がありました。運営システムの構造が複雑になり情報の伝達と集約に必要な時間が十分ではありませんでした。結果として、企画委員会、実行委員会の皆さんの高い対応能力で合同大会の運営を進めることができましたが、ボランティアベースでお願いできる仕事量を越えてしまったのではないかと考えています。

静岡大会にむけて、6年後の EAFES 大会にむけて

来年は日本生態学会が設立 60 周年を迎え、次期静岡大会は 60 周年記念大会となります。現在、大会企画委員会では陀安一郎委員長のもと、静岡大会への準備が進められ、すでに実行委員会と連携し、大会会場の諸事情に応じた運営案が議論されています。

大津大会の準備期間の一年は、私個人としては、学会における大会の意義について考えた一年でもありました。大会は研究成果の発表をはじめ各種情報交換の場であり、学会の発展につながる非常に重要なイベントです。しかし、大津大会の運営に携わっていただいた皆さんにとっては大会のための学会というような状況にしてしまったのではないかと反省しています。

大津大会では、大会の国際化へ向けての課題がみつきり、複数の組織の合同大会の難しさを実感することができました。いずれの問題も既存のシステムに単に何かを付け足すくらいでは対応できないことが含まれますので、根本からの検討が必要でしょう。次回 EAFES 大会が日本で開催される 2018 年における日本生態学会の状況は今とは大きくことなることも予想されます。それは EAFES 関係国においても同様でしょう。その様な変化に対応するためにも、大津大会での教訓を忘れないようにすること、今のうちから早めに検討しておくことが必要です。なによりも大会は会員の皆さんによって成り立つものですから、ご意見をおよせいただくなど大会の運営に積極的に関わっていただきたいと思います。最もお勧めいたしますのは大会企画委員として活動していただくことです。より良い大会を実現するために、生態学会をより一層発展させるために、どうぞよろしく願ひいたします。

*以下に、ポスター賞の審査をしてくださった皆さんのお名前を記して、あらためてお礼申し上げます。ありがとうございました。

相澤章仁、饗庭正寛、秋山吉寛、東典子、安立美奈子、阿部真、安部淳、安部哲人、阿部晴恵、天野一葉、新垣誠司、有村源一郎、飯島慈裕、飯田佳子、池田浩明、石井弘明、伊東明、伊藤洋、井上栄壮、今野浩太郎、岩井紀子、上野隆平、植松圭吾、潮雅之、内井喜美子、内海

真生、占部城太郎、江副日出夫、大澤剛士、大澤正嗣、大堀聰、岡田賢祐、岡本朋子、奥圭子、小野清美、小野賢二、小野田幸生、風間健太郎、梶光一、粕谷英一、片山昇、金田哲、金谷弦、壁谷大介、川合由加、川口利奈、川越哲博、川西基博、関崎悠一郎、岸茂樹、北出理、北野聡、北村亘、北山兼弘、木村恵、熊谷朝臣、熊野了州、栗山武夫、小池文人、小泉逸郎、五箇公一、小沼順二、小林知里、小山里奈、今藤夏子、齊藤隆、齋藤智之、斎藤琢、酒井敦、坂田剛、桜谷保之、笹川裕史、佐々木晶子、佐々木顕、佐々木茂樹、佐々木尚子、佐藤拓哉、澤田佳宏、柴田英昭、島田卓哉、下野綾子、上村真由子、城本啓子、鈴木まほろ、鈴木孝男、鈴木牧、曾我部篤、高木健太郎、高橋俊守、高原光、高柳敦、竹内剛、竹内勇一、立田晴記、田中啓太、田中幸一、玉手剛、千葉聡、土松隆志、露崎史朗、土居秀幸、富樫辰也、土畑重人、飛田博順、冨田美紀、富松裕、富松元、中井克樹、中田

兼介、長太伸章、永野昌博、中道康文、永光輝義、中村太士、永山滋也、難波利幸、西尾孝佳、西田隆義、長谷川成明、畑啓生、畑憲治、畑田彩、花岡創、原野智広、半谷吾郎、彦坂幸毅、日室千尋、平山寛之、平尾章、福井眞、藤井一至、藤田素子、古川拓哉、北條賢、星野仏方、堀正和、正木隆、松井淳、松井晋、松浦克美、松尾奈緒子、三橋弘宗、三宅尚、宮竹貴久、宮本康、向井貴彦、森章、森照貴、森長真一、山路恵子、山田俊弘、山根隆史、山平寿智、山本勝利、山本哲史、山本智子、山本京祐、八代田千鶴、横畑泰志、横溝裕行、吉岡明良、吉田勝彦、吉田丈人、吉村真由美、和田直也、Yongfei Bai、Liding CHEN、Jin-Sheng He、Chih-hao Hsieh、Gea-Jae Joo、Woo-Kyun LEE、Ke-Ming MA、Zehao Shen
(敬称は略させていただきました。また、この他1名の方が匿名を希望されました。)

記 事

I. 日本生態学会大会総会（2011年3月11日、参加者約100名）および全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 庶務報告（2011年4月～2011年2月）

1. 日本学術振興会より平成23年度科研費（出版助成金）の内定通知があった（6,400,000円）（4月1日）
2. 文部科学省より平成23年度科研費（公開講演会）の内定通知があった（1,200,000円）（4月1日）
3. 文部科学省へ平成22年度科研費（公開講演会）実績報告書を送付した（4月4日）
4. 日本学術振興会へ平成22年度科研費（出版助成金）実績報告書を送付した（4月5日）
5. ER編集委員の追加（山口典之氏）が全国委員により承認された（4月28日）
6. 大会企画委員ポスター部会6名が全国委員により承認された（4月30日）
7. 第16回生態学琵琶湖賞授賞式及び受賞記念講演を行った（7月10日）
8. 「会長及び全国委員選挙施行細則」の改正案が全国委員会にて承認された（8月13日）
9. 選挙管理委員候補者の谷内茂雄氏が全国委員会にて承認された（8月13日）
10. ドイツ・スイス・オーストリアの生態学会と日本生態学会の連携に関するMemorandum of Agreementが全国委員会によって承認された（8月16日）
11. 次期幹事長候補陶山佳久氏（東北大学大学院農学研究科）が全国委員会にて承認された（8月7日）
12. 640名の会員に2011年度会費の再々請求を行った（9月2日）
13. 電子情報委員会の設置が全国委員会にて承認された（9月25日）
14. 電子情報委員候補6名全員が全国委員会にて承認された（10月7日）
15. 「東日本大震災被災地復興計画に対する要望書」を内閣府特命担当大臣（防災）、国土交通大臣、環境大臣、農林水産大臣宛に送付した（11月7日）
16. 日本学術振興機構へ平成24年度科研費（学術刊行物）計画調査など申請書類一式を送付した（11月12日）
17. 鹿島学術研究助成について安部哲人氏の学会推薦が常任委員会にて承認された（11月13日）
18. 文部科学省に平成23年度科研費（研究成果公开发表）計画調査など申請書類一式を送付した。（11月14日）
19. 学会賞選考委員推薦の学会賞・宮地賞・大島賞候補者が全国委員会にて承認された（11月18日）
20. 次々期会長および次期全国委員選挙の開票を事務局にて行った（11月21日）
21. 団体会員に向けて平成23年度会費請求を行った（11

月29日）

22. 2012年会費請求書を個人会員に送付した（12月5日）
*定収入のない若手会員の割引申請は7名
 23. 「国立公園の地方移管に対する意見書」を内閣総理大臣（地域主権戦略会議議長）、総務大臣（地域主権推進担当大臣）、環境大臣、民主党幹事長（陳情要望対策本部長）、民主党地域主権調査会長に送付した（12月8日）
 24. 次期庶務幹事候補石田清氏（弘前大学）および次期会計幹事候補牧野能士氏（東北大学）が全国委員会にて承認された（12月11日）
 25. 次期保全生態学研究編集委員候補全員が全国委員会にて承認された（12月16日）
 26. 第16期常任委員7名が全国委員により承認された（1月10日）
 27. 日本学術振興会に平成23年度科研費・学術定期刊行物状況報告書を送付した。（1月12日）
 28. 京大生態研センター運営等に関する委員（拠点運営委員会委員）の推薦を全国委員に依頼した（1月17日）
 29. 新会計監事大澤晃氏が全国委員により承認された（1月19日）
 30. 次期ER編集委員長の推薦を全国委員に依頼した（1月26日）
 31. 第10回日本生態学会功労賞候補者の小泉博氏が全国委員により承認された（1月27日）
 32. ドイツ・スイス・オーストリアの生態学会と日本生態学会の連携に関するMemorandum of Agreementが締結された（2月15日）
 33. 常任委員会にて、法人化WGをたちあげ法人化に向けて準備していくことになった（2月11日）
- *他、各種集会へ後援・協賛の名義使用承認6件、論文・図等の転載2件

b. 2011年度学会誌発行状況、会員数、会費納入率

(1)学会誌発行部数および配本内訳(2011年12月末現在)

日本生態学会誌 61 巻

	1号	2号	3号
発行部数	3450	3380	3350
配本部数	3320	3268	3300
残部数	130	112	50

Ecological Research Vol.26

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	3450	3080	3100	3180	3180	3180
配本部数	3104	3080	3093	3092	3091	3088
残部数	346	0	7	88	89	92

保全生態学研究 16 巻

	1号	2号
発行部数	1390	1390
配本部数	1351	1380
残部数	39	10

配本内訳

	日本生態学会誌		Ecological Research		保全生態学研究	
	61巻3号		Vol.26 No.6		16巻2号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2293	64	2189	62	1072	18
学生会員	725	114	699	114	242	23
団体	111	0	111	10	22	9
国外個人会員	46	2	44	5	3	1
賛助	1	0	1	0	0	0
小計	3176	180	3044	191	1339	51
名誉会員	4	0	4	0	4	0
寄贈交換	48	0	40	0	45	0
購読	81	0	0	0	9	0
小計	133	0	44	0	58	0
合計	3309	180	3088	191	1397	51

(2) 会員数

	2010年12月末現在							2011年12月末現在						
	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計
北海道	194	72	19	82	22	2	391	190	76	17	116	33	1	433
東北	125	47	10	72	9	2	265	132	41	10	76	14	4	277
関東	661	333	86	319	79	5	1483	658	335	80	302	67	8	1450
中部	255	140	36	118	38	4	591	241	143	36	136	39	2	597
近畿	301	163	32	171	39	3	709	303	168	28	169	56	6	730
中四国	154	71	7	76	15	3	308	142	71	10	73	18	4	296
九州	177	63	19	66	15	2	342	172	65	21	61	15	2	336
小計	1867	889	209	904	217	21	4107	1838	899	202	933	242	27	4141
団体				A 88	B 24	C 5	117				A 90	B 21	C 5	116
国外一般							54							52
賛助							1							1
名誉							4							4
小計							176							173
合計							4283							4314

(3) 会費納入率（各年12月末現在）

	2010年		2011年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	93.3	66.9	95.4	88.0
東北	87.3	71.0	91.8	71.1
関東	89.5	72.4	92.6	73.5
中部	90.0	74.3	94.3	80.8
近畿	87.7	68.0	93.6	81.4
中四国	88.3	71.2	91.2	71.6
九州	91.1	66.2	93.0	70.5
平均率	89.6	70.0	93.1	76.7

c. 会計報告（2010年3月～2011年2月）

- 第15回宮地賞3名および第4回大島賞4名の受賞者へ賞金10万円ずつを送金した（3月24日）
- シュプリングァーへ2011年1号分の出版費として2,755,200円を支払った（3月31日）
- シュプリングァーへ2011年2号分の出版費として2,755,200円を支払った（4月12日）
- 自然再生ハンドブック印税386,000円の入金があった（4月15日）
- 各地区会へ2010年後期分の地区会費と地区還元金を支払った（4月22日）
- シュプリングァー社より2010年度売上還元金として

- 1,125,000円及びER編集事務費用1,620,000円の入金があった（4月28日）
- 土倉事務所へ生態誌60巻1号印刷代として1,756,912円を支払った（5月2日）
- 故鈴木信彦教授の遺族より寄付金として500万円の入金があった（5月25日）
- 土倉事務所へニュースレターNo.24印刷費として532,875円を支払った（8月1日）
- 土倉事務所へ保全生態学研究16-1印刷費として1,338,361円を支払った（8月4日）
- 土倉事務所へ生態誌61-2印刷費として1,870,323円を支払った（9月15日）
- 各地区会へ2011年前期分の地区会費と地区還元金を支払った（9月26日）
- 事務局パソコン入替（3台）費用として1,007,380円を支払った（9月20日）
- 土倉事務所へニュースレターNo.25印刷費として260,610円を支払った（10月6日）
- 土倉事務所へ選挙関連書類印刷費として365,925円を支払った（10月6日）
- みずほファクターの口座引落しにより471名分の次年度会費4,972,800円の入金があった（12月12日）
- シュプリングァーへ2011年3-6号分の出版費として10,735,375円を支払った（12月12・21日）
- INTECOL年会費2年（2010・2011年）分として648,866円を送金した（12月22日）
- 土倉事務所へ生態誌61巻3号印刷代として1,442,175円を支払った（12月26日）
- 土倉事務所へ保全誌16巻2号印刷代として904,890円を支払った（12月26日）
- 2011年度の会計監査が学会事務局で行なわれ会計は適正に行なわれたことが確認された（2月1日）
- (株)アライブネットへレンタルサーバ年間利用料として398,000円を支払った（2月2日）

2. 大会企画委員会

a. 大津大会概況

- ・公式集会数51件（以下の数は3月2日現在）
- ・ESJ59：シンポジウム10、フォーラム5、企画集会20
- ・EAFES5：シンポジウム11、特別シンポジウム5
シンポジウム旅費招待講演者学会招聘1件
Dr. Eelke Jongejans (Radboud University, Netherlands)
- ・非公式集会数（自由集会）32件
- ・一般講演数1467件
- ・口頭発表277件（うち英語44）
- ・ポスター発表1130件（ESJ日本語332, ESJ英語230, EAFES568のうち国外から61）
合同ポスター賞応募422件（うち国外から25）
- ・高校生ポスター発表35件
- ・参加申し込み者数2164人
- ・懇親会参加900人
- ・要旨集購入申込491件（ESJ406, EAFES85）
- ・問い合わせ件数188件（ESJ155, EAFES33）

b. 今期に実施したこと

- ・プログラムの日英併記。
- ・ポスター賞はESJとEAFESの合同運営、副賞
- ・ポスター発表から口頭発表への移動
- ・野外安全管理委員会フォーラムを昼休みに開催
- ・男女共同参画活動のアンケート
- ・企業説明会
- ・EAFES 特別シンポジウム など

c. 大会の現状と検討（各部会から）

- ・ポスター賞
- ・英語化
- ・キャンセルの扱い
- ・発表資格（未入会、会費未納）
- ・重複制限
- ・EAFES との合同大会 など
(文責：榎木勉)

3. Ecological Research 刊行協議会

a. Vol.26 について

No.	頁数	掲載論文数		分野内訳*			
		合計	外国	Z	P	A	O
1	236	25	16	7	15	2	1
2	240	24	17	12	10	1	1
3	210	22	18	8	10	3	1
4	176	18	13	11	6	0	1
5	152	14	12	4	3	0	7
6	122	11	8	4	3	1	3
計	1136	114	84	46	47	7	14

b. 年間投稿数推移

年度	投稿数 (*1)	通常論文
2002	166	166
2003	185	169
2004	223	209
2005	341	330
2006	416	362
2007	418	416
2008	439	422
2009	469	456
2010	443	435
2011	416	405 (*2)

*1 特別論文を含む

*2 2011.4.1～2012.3.11 まで

※日本人の投稿数が 87 (2009)、76 (2010)、63 (2011) と減少している。

c. 編集状況

投稿から最初の Decision まで：52 日

受理率：29% (2011)

Impact factor: 1.485 (2009)、5-year Impact factor: 1.623 (2009)

d. Ecological Research Award 2011 受賞について

受賞論文 (3 編)

① Vol 4 p. 791-799

Authors: Yukiko Sakata Bekku, Tsuyoshi Sakata, Tadashi Tanaka and Takashi Nakano

Title: Midday depression of tree root respiration in relation to leaf transpiration

② Vol 4 p. 835-844

Authors: Yoshito Chikaraishi, Nanako O. Ogawa, Hideyuki Doi and Naohiko Ohkouchi

Title: 15N/14N ratios of amino acids as a tool for studying terrestrial food webs: a case study of terrestrial insects (bees, wasps, and hornets)

③ Vol 5 p. 931-941

Authors: Hirotaka Tanaka, Hitoshi Ohnishi, Haruki Tatsuta and Kazuki Tsuji

Title: An analysis of mutualistic interactions between exotic ants and honeydew producers in the Yanbaru district of Okinawa Island, Japan

(文責：可知直毅)

4. 日本生態学会誌刊行協議会

a. 現在の投稿、審査、出版状況 (2012 年 3 月 16 日現在)

① 投稿状況

	原著	総説	特集	特集 受理	原著 総説 受理	却下	審査 中	学術 情報	連載
2012	0	0	1 (5 編)	0	0	0	1	0	2
2011	5	3	3 (24 編)	2 (16)	2	3	4	0	8
2010	7	8	6 (40 編)	6 (40)	15	6	0	3	8
2009	3	4	2 (19 編)	2 (19)	7	0	0	1	8

② 刊行状況

62 巻 (2012 年) 刊行状況

	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・ 記事	合計
1 号	2	1	1 (8 編)	0	3	0	14

61 巻 (2011 年) 刊行状況

	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・ 記事	合計
1 号	0	2	2 (6+5 編)	0	2	1	16
2 号	1	1	1 (9 編)	0	3	0	14
3 号	0	2	1 (6 編)	0	2	2	12

60 巻 (2010 年) 刊行状況

	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その他・ 記事	合計
1 号	0	3	1 (9 編)	1	3	0	16
2 号	1	1	1 (10 編)	1	3	1	17
3 号	0	1	1 (6 編)	2	2	0	11

b. 今年の大会のシンポジウム等の中で、将来特集を引き受けてくれそうな数

依頼件数 18 件 引き受ける 6 件 考慮中 3 件

c. 生態学会誌投稿規定の改定

以下のように、技術報告を査読論文の一つとする投稿規程の改訂が全国委員会で承認された。

(現在の投稿規定)

記事の区分 日本生態学会誌は以下の記事を掲載する。

- (1) 原著：生態学に関する新たに得た学術的知見をまとめ考察した論文。
- (2) 総説：生態学の各分野の現状を紹介し、、、、。
- (3) 特集：生態学の各分野の現状を紹介し今後の発展に資するために、、、。
- (4) 学術情報：編集委員による依頼執筆、あるいは投稿による、研究や教育に関する情報、生態学的な技術開発の報告、調査記録。
- (5) 意見：投稿による学会の活動、研究、教育などに関する意見。

査読

論文（原著、総説、特集）では、、、

(改定)

記事の区分

- (1) 原著：生態学に関する新たに得た学術的知見をまとめ考察した論文。
- (2) 総説：生態学の各分野の現状を紹介し、、、、。
- (3) 特集：生態学の各分野の現状を紹介し今後の発展に資するために、、、。
- (4) 技術報告：新知見を有する生態学的な技術開発の報告。
- (5) 学術情報：編集委員による依頼執筆、あるいは投稿による、研究や教育に関する情報、生態学的な調査記録。
- (6) 意見：投稿による学会の活動、研究、教育などに関する意見。

査読

論文（原著、総説、特集、技術報告）では、、、

(全国委員会に報告するだけの) 生態学会誌投稿規程の改訂

(現在の規定) 投稿の方法 原稿の全てを1つのpdfファイル、または図だけのファイル(pdf、jpegまたはtiff)とその他のpdfファイルの2つにまとめて、電子メール(3MB以内)で送るか、電子記録媒体に保存し郵送する。

PDFファイルで投稿することになっているが、MS-Wordファイルで送ってもらい、査読者と著者が変更履歴を残す形で、訂正箇所の指摘や、それに対応した変更を行うほうが、査読しやすい場合があるので、PDFかMSWordのいずれでも投稿できるようにする。

(改定) 投稿の方法 原稿の全てを1つのpdfかMSWordファイル、または図だけのファイル(pdf、MSWord、jpegまたはtiff)とその他のpdfかMSWordファイルの2つにまとめて、電子メール(3MB以内)で送るか、電子記録媒体に保存し郵送する。

(文責：鈴木英治)

5. 保全生態学研究編集委員会(刊行協議会)

a. 報告事項

① 16巻(2011)の発行状況

1号：原著7編、調査報告3編、保全情報1編、意見2編・・・計13編

2号：原著3編、調査報告3編、総説2編、実践報告1編、解説1編、保全情報1編・・・計11編

② 投稿・編集状況

2011年投稿状況

	原著	調査報告	総説	実践報告	解説	保全情報	意見その他	合計
新規投稿	13	3	6	3	2	1	4	32
受理	6	3	3	2	2	0	3	19
却下・取り下げ	2	0	1	0	0	1	0	4
審査中(繰越分含む)	5	0	2	1	0	0	1	9

2011年新規投稿数32編：受理19編、却下・取り下げ4編、審査中9編

2010年新規投稿数25編：受理22編、却下・取り下げ3編

2009年新規投稿数37編：受理27編、却下・取り下げ3編

③ 17巻1号：5月発行予定。特集「風力発電が生態系に与える影響を考える」を含め、13編の論文を掲載予定。

b. 審議事項

① 投稿促進の取り組み

投稿状況は順調であるが、引き続き投稿数増加の努力をする。生態学会の自由集会のテーマなど、特集の提案を募集。

② 会員制度改正にともなう保全生態学研究の対応

保全誌の購読会員には投稿資格を認める。投稿のオープン化は時期尚早。

(文責：角野康郎)

6. 自然保護専門委員会

日時：2012年3月17日(土) 11:30～13:30

場所：龍谷大学・3号館207

出席委員：佐藤、紺野、露崎(次期委員)、竹原、鈴木、吉田、井田、和田、安溪、逸見、増澤、加藤、清水、横畑、陶山、竹中、矢原、村上、立川(以上18名、新委員1名)

a. 審議および承認事項

① 2011年度活動費支出報告および2012年度活動費予算

1) 2011年度支出報告 支出合計518,390円

(内訳：アフターケア委員旅費・現地調査備船費・英文報告印刷費)

2) 2012年度活動費予算 年度予算60万円

(内訳：アフターケア委員会48万円、部会・役員事務12万円)

② 要望書および意見書提出への取り組み

安平川湿原(北海道)の大規模フェンの保全のための要望書提出の案件について、紺野委員(北海道)より経緯と現状説明があった。審議の結果、学術的価値を示すための資料が不十分であるため、地区会内での再検討を要することとなった。

③エネルギー問題担当専門委員の新設について（委員長提案）

新エネルギー開発等に絡んだ大規模事業の自然環境への影響の検討を目的とする。担当に安溪委員が選出された。

④次期委員および役員選出（日本生態学会役員一覧参照）

b. 報告事項

①自然保護専門委員会の活動報告（2011年3月から2012年3月）・・・＜資料1＞

②意見書等の提出

1) 「石狩海岸の風車建設事業計画の中止を求める要望書（北海道知事宛）」およびアフターケア報告がなされた。（佐藤委員）

2) 「東日本大震災被災地復興計画に対する要望（復興担当ほか大臣宛）」（委員長）

3) 「国立公園地方移管に対する意見」および「種の保存法への意見」（総理大臣ほか宛）」（吉田委員）

4) 「絶滅のおそれのある野生生物の保全施策に関する意見（環境省宛）」（吉田委員）

③問題検討作業部会報告（外来種問題検討作業部会）（村上部会長）

④アフターケア委員会報告

・石狩海岸風車アフターケア報告（佐藤委員）

・細見谷林道中止について（安溪委員）・・・＜資料2＞

・上関埋め立て工事中断について（安溪委員）

・・・＜資料3＞

・魚釣島問題アフターケア報告（横畑委員）

・・・＜資料4＞

⑤その他

アフターケア委員会によるポスター展示を大会期間中に実施（上関原発・細見谷・石狩海岸風発）。

<資料1>自然保護専門委員会の主な活動記録

2011年

3月15日 「石狩海岸の風車建設事業計画の中止を求める要望書」を、北海道知事あてに要望書を送付するとともに、そのコピーを、小樽市長、日本風力開発株式会社 社長、銭函風力開発株式会社 社長あてに発送（矢原委員長）

3月28日 外来生物法の見直しに関する提案を、環境大臣、農林水産大臣、経済産業大臣、国土交通大臣宛に提出（問題検討作業部会）

3月28日 「中国電力による上関の海面埋立工事の即時中断を求める緊急要請」を中国電力本社に持参（上関アフターケア委員会）

4月10日 国際シンポジウム「奇跡の海を守ろうーカムリウミスズメと上関の生物多様性」が広島市国際会議場ひまわりにおいて開催（生態学会後援）。約450人の参加者。（加藤副委員長）

5月12日 石狩海岸風車建設中止の要望書の内容を北海道庁に説明（矢原委員長、紺野委員、佐藤委員）

5月13日 石狩海岸風車建設中止の要望書の内容を日

本風力開発株式会社に説明（東京・矢原委員長）

11月7日 東日本大震災被災地復興計画に対する要望を日本生態学会全国委員会名で復興担当・国土交通・農林水産・環境の各大臣宛に提出した。（自然保護専門委員会・生態系管理専門会内で草案を作成）（矢原委員長）

12月21日 細野環境大臣に国立公園地方移管に対する意見書を持参し提出。（中静会長、吉田委員）

12月21日 希少野生生物保全施策への意見を環境省野生生物課にメール発送（吉田委員）

2012年

1月19日 広島県は大規模林道大朝鹿野線戸河内吉和区間（細見谷溪畔林を含む区間）について、事業継続をしないことを県農林水産委員会で表明。日本生態学会が2003年に関係各機関に提出していた「細見谷要望書」に関して目的を達成。これをもって細身谷アフターケア委員会は解散とする。

<資料2>細見谷要望書アフターケア委員会報告

（金井塚務）

2012年1月19日広島県は大規模林道大朝鹿野線戸河内吉和区間（細見谷溪畔林を含む区間）について、事業継続をしないことを県農林水産委員会で表明。この結果、日本生態学会が2003年に関係各機関に提出していた「細見谷要望書」に関しては目的を達成。今後は、細見谷溪畔林域を西中国山地国定公園の特別保護地区への格上げ等の課題に取り組むが、アフターケア委員会は一応解散する予定。

<資料3>上関要望書アフターケア委員会報告

（安溪遊地）

1. 現地の海の埋め立て工事そのものは中断しているが、中国電力は建設計画は諦めていない。
 - ・2011年2月23日午前2時に、600人の作業員で埋め立て強行を画策。
 - ・2011年3月11日の前後で状況は大きく変わった。上関町も原発が建たない場合を視野に入れ始めている。原発震災後も休むことなく敷地内の工事を進めている。
 - ・2012年3月末に国に提出する電力供給計画で、島根原子力発電所（松江市）3号機の運転開始と上関原発（山口県上関町）の着工の時期を、ともに「未定」とする。
2. 「長島の自然を守る会」との協力でカムリウミスズメ等の生物調査を重ねている。
3. 予定地・長島の自然を紹介する英文パンフレットを作成した。

<資料4>魚釣島問題アフターケア委員会（横畑泰志）

1. 2011年3月以降の活動報告
 - ・上陸調査の許可を求めるネット署名を開始（2011年3月15日～2012年3月15日）

- ・「センカクモグラを守る若手議連の会」発足
 - ・「センカクモグラを守る会第2回シンポジウム」
 - ・第27回大学等環境安全協議会技術分科会（富山）特別講演「尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題と国際生物多様性年」横畑泰志
 - ・衆議院決算行政監視委員会 尖閣諸島の現状把握につき「必要性あり」の見解でほぼ一致
 - ・2011年度環境行政改革フォーラム（東京都市大学）発表「尖閣諸島魚釣島の野生化ヤギ問題と「センカクモグラを守る会」
2. ネット署名のコメント欄の記入内訳（1031名、総数：241件）
- ・5つの類型に区分
 - 1) 自然環境や生物多様性の保全を求めるもの：77件
 - 2) 領有権の主張に関するもの：63件
 - 3) 保全や領有権以前の問題として政府が上陸を認めないことを批判するもの：20件
 - 4) 1)と、2)または3)の双方を含むもの：22件
 - 5) 意図の不明なもの：59件
- （文責：矢原徹一）

7. 外来種検討作業部会

a. 報告事項：

「外来生物法の見直しに関する提案」を環境大臣・農林水産大臣・経済産業大臣・国土交通大臣および環境省野生生物課宛て2011年3月28日に送付した。これに対しては野生生物課から、釣り餌の実態について資料があるかなど具体的な事項の質問があったが、他は応答がなかった。その後、平成23年3月付けで環境省野生生物課が「平成22年度外来生物法施行状況評価検討報告書」報告書を刊行した。これを見る限り、全体として提案は可能な範囲で受け入れて貰えたと思われる。この提案の提出後、環境省では平成23年度後半に「侵略的外来種リスト検討会」と「外来種防除戦略検討会議」の2つの委員会を、非公開で自然環境研究センター主催により開催した。3月末にはこのとりまとめが公表される見通しである。この両委員会を平成24年度から25年度にかけて公開で開催し、さらに論議を詰めてその結果を公表することが予定されている。

b. 審議事項：

①生物多様性国家戦略における外来種問題の取り扱いについて

本件についての要望書を当作業部会名で提出することとした。現在、中央環境審議会に生物多様性国家戦略小委員会が設置され、改訂作業が5月末までに行われる予定であり、これを見ながら、適切な時期（4月下旬）に提出の手続きを取る（原案が公表されてからでは変更は困難と考えられるので、素案に盛り込むことを目標とする）。今回、要望内容に関しての論議を行ったが詳細は省略する。

提案理由：現在、生物多様性国家戦略2010の改訂作業が行われつつある。しかし、生物多様性国家戦略2010の実施状況の点検結果及び改訂のための会議を見る限

り、外来種に関する記述は断片的で、今後の取り組み方向が明示されていない。愛知目標をどう具体化するかが論点となる。提案内容については、4月16日に国立環境研究所で本件等作業部会以外の関係者を含めてワークショップを開催し、その内容を詰めて原案を作成し、部会委員にメール会議で合意を取るとともに自然保護委員会にも了解を求めた上、提出する予定である。

②外来生物ハンドブックについて

外来生物法の施行以来、外来種に関する関心が高まり、各地で防除の取り組みなどが行われつつあるが、対症療法に終始し、計画的かつ戦略的な取り組みは少ない。外来種対策を進める上で、将来ベースとなるような本を作る必要があり、現在の章構成なども再検討の必要がある。戦略的外来種対策のあり方や外来種対策の日本向けガイドラインの作成等緊急課題を解決しながら、継続して原案の作成に当たることとする。

（文責 村上興正）

8. 将来計画専門委員会

「重要な報告事項」

a. 生態学会の国際化に関する提案

①外国人が入会しやすくなるよう手続きの改善と、HP上のインストラクションの充実の必要性が指摘された。

②発展地上国の研究者が大会に参加しやすくなるようシステム改善の必要性—参加費に途上国枠を設定するなど。

b. 生態学キャリアの活用に関する提案

初等中等教育における課外学習の教材を作成。教材をもとに課外学習を担当できる能力者に資格を与える制度を生態学会として検討すべき。

c. 災害復興に関する提案

被災者のふるさとの自然が守られるような復興の実現を生態学会として政策決定者に働きかけるべきである。

d. 委員の交代

湯本貴和委員の異動により地球研代表の将来計画専門委員を酒井章子氏に交代する。

（文責：辻和希）

9. 生態教育専門委員会

a. 『生態学入門（第2版）』の完成、4月初旬の刊行

・50人もの執筆者、査読者、編集委員会がメールでの作業に関わり、完成した。

・新学期には書店に並ぶ予定。

・学会創立60周年記念事業の出版となり、松田会長の挨拶文も掲載されている。

b. 新委員会（任期：2012年4月～2014年3月）の承認について

・以下の委員構成で全国委員会、総会の承認を受けることになった。

○非教育学部系枠：

西脇亜也（宮崎大）留任（委員長）

山村靖夫（茨城大）留任

浅見崇比呂（信州大）留任

嶋田正和（東京大）留任

畑田 彩（京都外大）新委員

○教育学部系枠：

平山大輔（三重大）新委員
丑丸敦史（神戸大）新委員

○高校教員枠：

広瀬祐司（大阪府教育センター）留任
中井咲織（立命館宇治中学・高等学校）留任

○博物館枠：

亀田佳代子（滋賀県立琵琶湖博物館）留任

計 10 名

c. 新企画『Web 版 生態学実習ガイドブック』について

- ・インターネットで生態学の実験・野外実習を募集し、査読をして、改訂が完了したら順次、Web 版としてアップする。紙媒体は作成しない方針。
- ・高校生物の 50 分授業向け、高校生物部の研究向け、大学 1～2 年生向けなどを設ける。

d. 新旧委員の体制更新

- ・当委員会に長く関わった委員については、新しい委員に就任してもらい、順次交代を進める。西脇・新委員長の下で、委員交替の原則ルールを構築する。

※参考：横井：1999.4～2003.3、渡辺：2003.4～2007.3、嶋田：2007.4～2012.3

（文責：嶋田正和）

10. 生態系管理専門委員会

a. 2011 年度活動報告

①自然再生講習会

1) 中海講習会

名称：日本生態学会自然再生講習会 第 3 回 「科学的知見は自然再生実施計画にどのように盛り込まれるのか—いくつかの湖沼や湿原を例にして—」

期間：2011 年 8 月 6 日（土曜）

開催場所：松江テルサ大会議室（JR 松江駅北口）

内容：

13:00-13:10 竹門康弘（京都大学）・中尾繁（中海自然再生協議会）主催者挨拶

13:10-13:50 竹門康弘（京都大学）深泥池（京都府）の例

13:50-14:30 西廣淳（東京大学）霞ヶ浦（茨城県）の例

14:30-14:40 休憩

14:40-15:20 中越信和（広島大学）八幡湿原（広島県）の例

15:20-16:00 質疑応答

司会 國井秀伸（島根大学）

参加者数：一般参加者 68 名

2) 阿蘇講習会

名称：日本生態学会自然再生講習会 第 4 回 「半自然草原の再生の理念と技術」

期間：2011 年 10 月 29 日、30 日

開催場所：国立阿蘇青少年交流の家（阿蘇市一の宮町宮地 6029-1）

内容：

第 1 日目（10 月 29 日）

13:00-13:10 主催者挨拶 竹門康弘（京都大学）・高橋

佳孝（阿蘇草原再生協議会）
13:10-13:50 矢原徹一（九州大学）生物多様性からみた草原再生の理念と技術

13:50-14:30 中越信和（広島大学）重要文化景観からみた草原再生の理念と技術

14:30-14:40 休憩

14:40-15:20 津田智（岐阜大学）火を活用した草原再生のエコロジーと実践技術

15:20-16:00 中島慶次（環境省九州地方環境事務所）阿蘇草原再生事業の取り組みと課題

16:00-16:10 休憩

16:10-17:10 質疑応答

司会 西廣淳（東京大学）

第 2 日目（10 月 30 日）

8:30-13:00 現地視察：輪地切り・輪地焼き、草小積み、草泊り、放棄地＋再生地、あか牛放牧、バイオマス利用など

参加者数：一般参加者 57 名

②麻機遊水地

フォローアップ担当の角野委員から報告。平成 25 年の実施計画（「あさはた緑地」対象）作成に向けて、今後も継続して関与が必要な状況である。

③国際景観生態学会

中越委員、鎌田委員が、日本の自然再生について報告し、英文パンフレット（COP10 の際に作成したもの）を活用し、学会の取り組みについても紹介した。

b. 今後の活動

① 2012 年度自然再生講習会

徳島（高丸山千年の森）での開催

・担当：鎌田委員

・7-8 月を候補に検討（地域での他の行事との調整が必要）

・エクスカージョンも実施予定

②次々回の自然再生講習会

・ブランド作物（農地での保全、生物多様性と経済）をテーマにした講習会を検討する。

③麻機遊水地フォローアップ

静岡大会で自然再生をテーマにしたフォーラムを開催（麻機遊水地も考慮）する。意見書も検討する。

④ COP10 のときに使ったパンフレットを学会 HP に掲載してもらう。

⑤資格認定

学会の法人化、日本緑化センターの「自然再生士」などの動きに対応して、今後の方針を検討するワーキンググループを作成（中越委員、鎌田委員）。

⑥震災復興事業に関する監視と情報発信

年内に他学会との共催によるフォーラム開催を検討する。今後も生態系管理に関する課題の情報収集に努める。

（文責：竹門康弘）

11. 大規模長期生態学専門委員会

a. 各種ネットワーク活動報告

① JaLTER

ILTER 年次総会を北大で行い 25 カ国から約 100 名が

参加した。この総会で ILTER として研究イニシアチブを初めて提案することになった。

八甲田（東北大）、（山形大）が準サイトとして今年度新規登録、現在コアサイト箇所、準サイト箇所 GRENE（文科省グリーンイノベーション）に JaLTER として参画

② GLP

事務局が交代。今月末ロンドンで開催の会議で今後の活動計画を提示

③ CTFS

スミソニアン熱帯研究所が当初熱帯で展開していた大規模調査区を最近5年間は温帯でも展開。特に中国には25ヘクタール規模のプロットを数カ所設置。

④ 林野庁森林資源モニタリング（全国4km）

来年度3種類のデータ（分布、毎木調査等）を階層的に公開予定

⑤ 震災など大規模な自然災害の影響評価を長期にわたって行うために、データだけではなくサンプルのアーカイブも重要。いかに体制を作っていくか、今後引き続き議論することとした。

b. 来年生態学会フォーラム（案）

「データペーパーの書き方」コーディネーター中村・真板

c. 委員の交代

佐竹暁子→黒川紘子（東北大）、鈴木準一郎→鈴木智之（信州大）、甲山隆司→伊東明

（文責：日浦勉）

12. 野外安全管理委員会

a. 委員の任期（2012.4～2014.3）

鈴木準一郎（委員長） 大館智志 粕谷英一
飯島明子 石原道博

b. 2012年度活動予定

- ・野外調査安全管理マニュアル出版
生態学会和文誌として出版する。
- ・2012年大会で実施するランチョンセミナーをふまえ、そこでの資料を公開する。
- ・2013年大会でのランチョンセミナー
野外調査の初心者を中心とした安全対策の啓発と研究室運営者を対象とした組織的な安全対策啓発のためのランチョンセミナーを企画する。

c. 2011年度活動報告

- ・野外調査安全管理マニュアル出版準備
生態学会和文誌での出版を目指して、原稿の改訂を進めた。
- ・2011年大会において、フォーラムを実施した。安全対策啓発のための教育用スライド案を示し、それに対するコメントを募った。その席で、次年度大会でのランチョンセミナーを求める意見があがった。
- ・2012年大会でのランチョンセミナー
次年度の大会において、野外調査の初心者を中心とした安全対策の啓発のためのランチョンセミナーを企画することとなり、準備を進めた。

（文責：鈴木準一郎）

13. キャリア支援専門委員会

a. 来年度の委員について

現委員全員が来年度まで留任する（オブザーバの委員3名は、正式な委員就任が全国委員会で認められた。）ただし、学生の委員については「学業に支障をきたさないよう十分配慮する」との付帯事項をつける。

b. 来年度の活動計画について

若手支援：フォーラム企画、企業ブース・説明会企画、ホームページ、海外若手交流
男女共同参画：学協会連絡会シンポジウム、運営委員会への参加、女子中高生夏の学校、生態学会において活動報告、大規模アンケート

c. 2011年度の活動：学会企画

- ・生態学会キャリア支援フォーラム
3月21日 10時～12時 8号館 room F
（司会：飯島委員）
内藤大輔（（株）パシフィックコンサルタンツ）
建設コンサルタントという選択肢
早川昌宏（大阪府環境農林水産部みどり・都市環境室）
大阪府の自然環境行政について
丸幸弘（株式会社リバネス 代表取締役 兼 CEO）
「サイエンスを伝えるビジネス～「博士号」の使い方～」

総合討論

- ・企業ブース・企業説明会
3月19日～21日（説明会は21日12時15分～16時）
出展企業：株式会社リバネス、野生動物保護管理事務所、国土交通省 近畿地方整備局、大阪府 環境農林水産部、西日本高速道路株式会社、（株）レスポンスアビリティ、（株）味の素、（株）NTT、サラヤ（株）、（株）富士通研究所
- ・男女共同参画活動報告ポスター、大規模アンケート紹介パネル、ご意見ボックス、託児室アンケート

d. その他

ホームページ作成、学協会連絡会シンポジウムでのポスター発表、学会大会におけるシンポジウム企画者の男女比・年齢構成アンケート、要望書への対応
（文責：半場祐子）

14. 電子情報委員会

a. 委員会設置の背景

学会が扱う諸情報の電子化に伴うインフラ整備が、ハード面でも人的な面でも十分ではない。当面の対応と、中・長期的視点に立った方針とを整理し、学会としてやるべきことを明確にする必要がある。

b. 当面の課題

- ①この委員会で扱う項目を整理する
- ②項目ごとに、内容、担当者（外注も含めて）、予算的手当を明確にし、学会内での認識の共有を計る。

c. 検討にあたり考慮すべきポイント

持続性の担保（インフラも管理も）、過剰なボランティア作業の回避、作業の集約化による合理化、予算的な負担とのトレードオフ、安定性・セキュリティの担保

c. 当面の方針（主なもの）

- ①電子情報委員会は、枠組み作りなどの技術的サポート・提言・助言を行う（中身作りはそれぞれの担当組織の仕事）。当面、事務局に専門スタッフを置くことは困難だが、必要に応じてアルバイト・外注に予算をつけることは可能であり、必要に応じて具体的な発注業務を検討する。
- ②情報提供系ウェブページの枠として、共通のCMS（コンテンツ・マネジメント・システム）の利用を検討する。電子情報委員会は、セットアップと簡単なインストラクションまでを担当。→まずはESJ60の大会案内ページで試行する方向で検討。
- ③会員情報管理は、データベースシステムの置き場所（ローカルかネット上か）を含め、可能な管理形態を検討する。会員情報の使い方のヒヤリングを踏まえる。
- ④大会関連オンラインシステムは、現システムを維持しつつ外注の可能性も検討する。

- ⑤データベースのデータの置き場所・管理ポリシーは幹事長・編集委員会の検討課題

（文責：竹中明夫）

15. 60周年記念事業について（静岡大会）

将来計画専門委員会の辻委員長より提案があり2012年2月の常任委員会で承認された。

- (1) 60周年記念大会（2013年3月）にて記念シンポを企画することが承認された。またEAFESとの連携を意識して中国、韓国の力ある研究者を招聘演者としてはどうかとの提案があった。
- (2) 生態学入門の改訂版を60周年事業の一環とすることが提案され承認された。
- (3) 日本生態学会の歴史を記録するため、50周年記念事業において行われたように、有識者による座談会を開催することとなった。

B. 承認事項

1. 2011年度決算

2011年度決算案が承認された。

収入の部			支出の部		
	11 予算	11 決算		11 予算	11 決算
会費			会誌発行費		
一般会員	31,500,000	32,334,880	ER	20,000,000	19,966,845
学生会員	7,100,000	8,626,020	生態誌	5,200,000	4,454,160
外国会員	450,000	289,700	保全誌	2,100,000	1,531,251
団体会員	2,300,000	2,351,673	ニュースレター	1,200,000	1,079,085
賛助会員	20,000	20,000	和文誌編集費	100,000	52,728
和文誌購読	700,000	713,400	小計	28,600,000	27,084,069
小計	42,070,000	44,335,673	会議費	100,000	105,173
ER 売上還元金	1,125,000	1,125,000	旅費・交通費	2,300,000	2,475,010
編集事務費用（シュプリンガーより）	1,620,000	1,620,000	人件費	13,500,000	13,161,010
Back No. 売り上げ	30,000	6,000	地区会へ還元金	1,500,000	1,654,300
科研費	8,200,000	7,600,000	大会支出	23,000,000	22,677,627
出版印税	500,000	1,151,126	公開講演会	1,400,000	1,400,840
利子収入	10,000	5,938	INTECOL 会費	760,000	648,866
広告代	180,000	180,000	事務費		
著作権使用料	300,000	385,759	通信費	850,000	555,407
ER 超過ページ代	700,000	1,171,500	消耗品費	250,000	1,258,810
大会収入	23,000,000	22,277,837	雑費	250,000	460,649
講習会費	200,000	193,650	銀行手数料	140,000	118,630
その他		105	レンタルサーバ料	413,750	403,250
前年度繰越金	33,262,816	33,262,816	事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	378,000	378,000
			小計	3,961,750	4,854,746
			各種委員会費	1,000,000	652,396
			選挙費	880,000	365,925
			EAFES 費用	100,000	0
			講習会費	421,821	261,844
			次年度繰越金	33,674,245	37,973,598
合計	111,197,816	113,315,404	合計	111,197,816	113,315,404
単年度収入	77,935,000	80,052,588	単年度支出	77,523,571	75,341,806

特別会計

特別会計Ⅰ（宮地基金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
	11 予算	11 決算		11 予算	11 決算
前年度繰越金	3,104,420	3,104,420	宮地賞賞金	300,000	300,000
預金利息	0	476	雑費	2,835	2,835
			次年度繰越金	2,801,585	2,802,061
合 計	3,104,420	3,104,896	合 計	3,104,420	3,104,896

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	11 予算	11 決算		11 予算	11 決算
前年度繰越金	9,736,873	9,736,873	大島賞賞金	400,000	400,000
預金利息	0	1,530	雑費	3,675	3,675
			次年度繰越金	9,333,198	9,334,728
合 計	9,736,873	9,738,403	合 計	9,736,873	9,738,403

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	11 予算	11 決算		11 予算	11 決算
前年度繰越金	1,109,496	1,109,496	旅費	200,000	275,755
預金利息	0	173	その他諸費用	40,000	101,453
			次年度繰越金	869,496	732,461
合 計	1,109,496	1,109,669	合 計	1,109,496	1,109,669

2. 第 61 回大会（2013 年）開催地

第 61 回大会は中四国地区会担当、開催地については未定。

3. 第 62 回大会（2014 年）担当地区会

第 62 回大会は九州地区会が担当することが承認された。

C. 審議事項

1. 2012年度予算案について

2012年度予算案が決議された。

収入の部			支出の部		
	11 決算	12 予算		11 決算	12 予算
会費			会誌発行費		
一般会員	32,334,880	31,000,000	ER	19,966,845	20,000,000
学生会員	8,626,020	8,000,000	生態誌	4,454,160	5,000,000
外国会員	289,700	250,000	保全誌	1,531,251	1,900,000
団体会員	2,351,673	2,000,000	ニュースレター	1,079,085	1,200,000
賛助会員	20,000	20,000	和文誌編集費	52,728	70,000
和文誌購読	713,400	600,000	小計	27,084,069	28,170,000
小計	44,335,673	41,870,000	会議費	105,173	150,000
ER 売上還元金	1,125,000	1,215,000	旅費・交通費	2,475,010	3,000,000
編集事務費用 (シュプリンガーより)	1,620,000	1,665,000	人件費	13,161,010	13,500,000
Back No. 売り上げ	6,000	0	地区会へ還元金	1,654,300	1,600,000
科研費	7,600,000	7,000,000	大会支出	22,677,627	20,000,000
出版印税	1,151,126	750,000	公開講演会	1,400,840	1,200,000
利子収入	5,938	10,000	INTECOL 会費	648,866	350,000
広告代	180,000	180,000	事務費		
著作権使用料	385,759	300,000	通信費	555,407	850,000
ER 超過ページ代	1,171,500	700,000	消耗品費	1,258,810	250,000
大会収入	22,277,837	20,000,000	雑費	460,649	250,000
講習会費	193,650	400,000	銀行手数料	118,630	140,000
その他	105	0	レンタルサーバ料	403,250	413,750
前年度繰越金	33,262,816	37,973,598	事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	378,000	500,000
			小計	4,854,746	4,083,750
合計	113,315,404	112,063,598	各種委員会費	652,396	1,500,000
単年度収入	80,052,588	74,090,000	選挙費	365,925	0
			EAFES 費用	0	100,000
			講習会費	261,844	400,000
			次年度繰越金	37,973,598	38,009,848
			合計	113,315,404	112,063,598
			単年度支出	75,341,806	74,053,750

特別会計

特別会計 I (宮地基金)

収入の部			支出の部		
	11 決算	12 予算		11 決算	12 予算
前年度繰越金	3,104,420	2,802,061	宮地賞賞金	300,000	300,000
預金利息	476	0	雑費	2,835	2,835
合計	3,104,896	2,802,061	次年度繰越金	2,802,061	2,499,226
			合計	3,104,896	2,802,061

大島基金

収入の部			支出の部		
	11 決算	12 予算		11 決算	11 予算
前年度繰越金	9,736,873	9,334,728	大島賞賞金	400,000	200,000
預金利息	1,530	0	雑費	3,675	1,995
合計	9,738,403	9,334,728	次年度繰越金	9,334,728	9,132,733
			合計	9,738,403	9,334,728

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	11 決算	12 予算		11 決算	12 予算
前年度繰越金	1,109,496	732,461	旅費	275,755	100,000
預金利息	173	0	その他諸費用	101,453	0
			次年度繰越金	732,461	632,461
合 計	1,109,669	732,461	合 計	1,109,669	732,461

2. 会則改正について

* 総会にて以下の改正案が提案されたが原案は決議されず、全国委員会に審議・決定を一任することが決議された。

【日本生態学会宮地賞に関する会則の変更】

経緯：

2011年1月に他界された元佐賀大学教授の故鈴木信彦先生のご遺族の方から、日本生態学会に500万円の寄付があり寄付金を生態学会で活用して頂きたいとの連絡がありました。この寄付金の使途について常任委員会にて議論をした結果、鈴木さんが生態学分野で立派な業績をあげ、教育者としてもすぐれた若手を育てられた実績を讃えるために鈴木先生の名前を冠する賞を作ることが提案されました。若手研究者を奨励するための賞として、すでに「日本生態学会宮地賞」が存在するため、この賞の名称を変更して「日本生態学会奨励賞（日本生態学会宮地・鈴木賞）」とし、ご遺族からの寄付金を宮地賞基金とあわせてこのための基金として用いることが提案されました。

<会則の変更> 会則 29 条の ii

日本生態学会 会則 (2012 年 3 月改正)

(旧)「日本生態学会宮地賞」すぐれた研究業績を持ち、生態学の発展に大きな貢献をしている本学会の若手会員を主な対象者とする。

(新)「日本生態学会奨励賞（日本生態学会宮地・鈴木賞）」すぐれた研究業績を持ち、生態学の発展に大きな貢献をしている本学会の若手会員を主な対象者とする。

3. ABC 会員制度の廃止について

* 総会にて以下の方針が決議された。

日本生態学会会員のみなさま

日本生態学会は、2003 年以降 ABC と 3 種類の会員資格があります。A・B 会員は学会発表資格があるのに対し、保全生態学研究（以下、「保全誌」）のみを購読する C 会員には大会での一般講演やシンポジウムの発表資格がありません。また、大会シンポジウム等で C 会員が発表を依頼された際には、学会参加費自体が免除される特例が含まれる等、複雑で分かりにくい制度となっています（参考資料参照）。

ABC 会員制度発足の経緯を説明します。保全誌は保全生態学研究会の雑誌でしたが、編集体制の強化と一層の普及のため、2003 年に発行主体を生態学会に移行し

ました。これに伴い、保全誌の購読者には生態学の会員になってもらう必要が生じました。そのため、保全生態学研究会と生態学会の両方の会員だった方を B 会員、保全生態学研究会のみの会員だった方を C 会員とし、C 会員は従来の保全生態学研究会の会費で生態学会の正会員となることができ、保全誌の購読と保全誌編集委員会の参加の権利が引き続き確保されました。

常任委員会では、現在の分かりにくい ABC 会員制度を廃止し、正会員を一本化することを検討し、B、C 会員に対してアンケートを行いました。

アンケート結果によれば、B 会員（英文誌、生態誌、保全誌を購読する会員）約 900 名のうち 60 名から回答があり、C 会員制度の廃止に反対する方はほとんどいませんでした。しかし、C 会員の廃止に伴い保全誌の活性化を妨げることはないよう、配慮する必要があるという意見が複数ありました。他方、C 会員約 230 名のうち 21 名から回答があり、そのうち旧保全生態学研究会会員は 7 名でした。この 21 名のうち、C 会員制度を廃止した場合、正会員となるのは 8 名、退会して購読するのが 4 名、退会して購読もしないのが 7 名、不明 2 名という結果でした。ここから、以下の諸点が読み取れます。

アンケート結果を分析すると、現在の C 会員には保全誌の購読を希望される方と、発表資格がなくても本学会の会員であることを希望される方がいることがうかがわれます。しかし、その方々は、やはり本学会会員の権利と義務を理解いただき、A 会員と同じ会費を納めていただきたいと思います。この結果を踏まえて、以下を提案いたします。

1. C 会員を廃止し、一般正会員と学生会員について、年会費をそれぞれ 12000 円と 10000 円とする（従来の A 会員の会費に同じ）。
2. 正会員で保全誌の定期購読希望者は、上記に 2000 円を追加する（従来の B 会員と同じ。英文誌と生態誌の紙媒体不要の会員への減免措置は従来通り）。
3. 保全誌の定期購読のみを希望される方は、非会員の定期購読者とする。定期購読者は保全誌の投稿資格を維持する。年間購読費用は 5000 円とする（学生割引は設けない）。

この措置は会則改定を伴うため、実施するにあたっては来年以後の全国委員会の議を経て総会で決議する。

よろしくご検討のほど、お願い申し上げます。

(補足)

1. C 会員制度は、旧保全生態学研究会会員を本学会に

迎える際に不利益にならないように新設した制度であり、学会誌や発表の権利を持たない会員のために設けた制度ではありません。保全生態学研究会自体は保全誌移行後も活動を続けていましたが、2010年3月に解散しました。現行会費と同じ料金で保全誌の定期購読が可能ならば、旧保全生態学研究会会員の権利が維持され则认为されます。

2. C会員は非会員にも認められている自由集会の参加資格以外、一般講演や大会シンポジウム等での企画提案、発表資格がありません。そのため、シンポジウム企画者がC会員を招待して講演していただく場合、非会員と同じく大会参加費を免除することになっています。学会への帰属意識を維持するためにC会員になっていただいているとすれば、その大会で発表の機会を得ているのに大会参加費を免除されるという制度は、AB会員からみて不公平だと思います。
3. 本学会の会費が高いという印象をもたれる方は多いかもしれません。しかし、決算を見ればお分かりのように、支出の大半はEcological Research誌（以下、ER誌）と日本生態学会誌を維持するための費用であり、大会を含めた学会活動を支える事務経費に充てられています。これらの発行部数を減らしても編集発行費用はあまり変わりません。両誌の紙媒体不要の方の会費減免は、不要となる郵送代程度しか安く設定できません。英文誌はすでに非会員でも投稿資格があり、電子媒体は多くの図書館等で見ることができます。したがって、紙媒体不要の方の会費を下げると、多くの方が紙媒体不要を選択し、学会の最重要使命の一つである学会誌の発行が維持できなくなると懸念されます。学会が学会誌の発行を通じた学術活動によって維持されていることを、ぜひご理解いただければ幸いです。
4. 英文誌と生態誌については紙媒体なしの会員制度や既刊号のインターネット掲載などの制度がありますが、保全誌については会費を安く抑えているために、これが不可能です。C会員の会費は旧保全生態学研究会会員を本学会に迎える際に不利益にならないように設定したため、編集発行の実費が会費となっています。

付表) ABC 会員制度廃止の案。※が変更される項目

会員の権利		正会員	(新) 保全誌 定期購読者	現在のC会員
配布	ER誌	○	無	無
	生態誌	○	無	無
	保全誌	選択*	○	○
投稿	ER誌	非会員も含めて可能		
	生態誌	○	無	無
	保全誌	○	○	○
発表(除招待)	全セッション	○	無	無
	自由集会	○	○	○
総会・委員	選挙・被選挙権	○	無※	○
年会費	正会員	11,000円	5,000円	5,000円
	学生会員	8,000円	5,000円※	2,500円
	(保全誌購入)	+2000円	-	-
	団体会員	20,000円	-	-

II. 第59回日本生態学会大会の記録

第59回日本生態学会大会(ESJ59)は、第5回東アジア生態学会連合大会(EAFES5)との同時開催で、龍谷大学瀬田キャンパスを会場として2012年3月17日～3月21日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、ESJシンポジウム10、ESJフォーラム5、ESJ企画集会20、EAFESシンポジウム11、EAFES特別シンポジウム5、自由集会32、一般講演(口頭発表)277、一般講演(ポスター発表)1130、高校生ポスター35、が行われました。参加者は2456名でした。5日間の日程とポスター賞(日本生態学会公認表彰)受賞者は以下の通りです。

日程

- 3月17日 公開講演会、全国委員会、各種委員会(大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会)、自由集会
- 3月18日 シンポジウム、一般講演(ポスター発表)、企画集会、自由集会
- 3月19日 シンポジウム、一般講演(口頭発表)、一般講演(ポスター発表)、フォーラム、企画集会、自由集会
- 3月20日 総会、各賞授賞式、受賞講演、一般講演(ポスター発表)、高校生ポスター発表、企画集会、懇親会
- 3月21日 シンポジウム、一般講演(口頭発表)、フォーラム、ランチョンセミナー、企業説明会

ポスター賞受賞者

<Plant community>

Excellent Poster

*Matsumoto, S. (Niigata Univ.), Ishida, S. (NIES), Takanose, Y. (Green-sigma Co., Ltd.), Kamitani, T. (Niigata Univ.)

Pattern of wetland plant species occurrence in a rice paddy canal network on the Echigo Plain, Japan.

*Saito, M., Aoki, T. (Kanazawa Univ.)

Distribution of riparian forest tree species on landslides in a heavy snowfall region.

*Nagata, Y., Ushimaru, A. (Kobe Univ.)

Decrease in plant diversity due to changes in management measures and land abandonment in meadows.

<Plant ecophysiology>

Best Poster

*Sugiura, D., Tateno, M (Tokyo Univ.)

A mechanistic model controlling leaf/root biomass allocation in individual plant level.

Excellent Poster

*Yamaguchi, D. (Tohoku Univ.), Muller, O. (Colorado Univ.), Nakaji, T., Hiura, T. (Hokkaido Univ.), Hikosaka, K. (Tohoku Univ.)

Seasonal change in temperature response of photosynthesis in *Quercus serrata* canopy leaves exposed to experimental warming.

*Machino, S., Nagano, S., Hikosaka, K. (Tohoku Univ.)

The difference in Rubisco-limited photosynthesis among *Polygonum cuspidatum* ecotypes inhabiting different latitudes and altitudes.

<Fungus / Microbe>

Excellent Poster

*Muraoka A. (Tohoku Univ.), Kanaya G. (NIES), Shikano S. (Tohoku Univ.)

The spatio-temporal distribution of *dsrB*-encoding microbial community structures in response to environmental gradients in the sediments of two brackish lagoons.

*Yeh, Y.C. (National Taiwan Univ.), Gong, G.C. (National Taiwan Ocean Univ.), Hsieh, C.H. (National Taiwan Univ.)

Biogeography of bacterial community along an environmental gradient in the southern East China Sea.

<Succession / Regeneration>

Excellent Poster

*Akaji, Y. (Okayama Univ.), Makimoto, T. (Okayama Pref.), Kinoshita, S., Otoda, T., Miyazaki, Y., Hirobe, M. (Okayama Univ.), Mizunaga, H. (Shizuoka Univ.), Sakamoto, K., Yamamoto, S. (Okayama Univ.)

Spatial distribution of *Fagus crenata* seedlings and saplings in a cool temperate old-growth forest of western Japan: Effects of dwarf bamboo, topographic features, and canopy openness.

*Shibata, R. (Tohoku Univ.), Tanaka, H. (FFPRI), Shibata, M. (FFPRI Tohoku), Iida, S. (FFPRI Hokkaido), Hatta, F., Kurokawa, H., Nakashizuka, T. (Tohoku Univ.)

Interspecific variation in size dependent resprouting ability

of temperate trees and its adaptive significance.

*Sato, K. (Hokkaido Univ.), Makoto, K. (Umea Univ.), Shibuya, M., Koike, T. (Hokkaido Univ.)

Effect of understory vegetation on different successional groups of seedlings regenerating in a deciduous broad-leaved forest after a surface fire.

<Biodiversity>

Best Poster

*Sakaguchi, S. (Kyoto Univ.), Qiu, Y-X., Liu, Y-H., Qi, X-S. (Zhejiang Univ., China), Kim, S-H., Han, J. (Korea Forest Research Institute, South Korea), Takeuchi, Y. (Graduate Univ. of Advanced Studies), Worth, R.P.J., Yamasaki, M. (Kyoto Univ.), Sakurai, S. (Kyoto Prefectural Univ.), Isagi, Y. (Kyoto Univ.)

Historical fragmentation and reconnection of East Asian temperate forests, inferred from range-wide phylogeography of a key canopy tree species, *Kalopanax septemlobus*.

*Lin, W., Miki, T., Hsieh, C. (National Taiwan Univ.)

Adaptive dispersal can promote species coexistence in fluctuating environments.

*Tamate, S., Masakado, K., Makino, T. (Tohoku Univ.)

Relationship between duplicated gene and environmental adaptation in mammalia.

Excellent Poster

*Matsui, S. (Kyoto Univ.), Inui, R. (Tokushima Univ.), Yamashita, Y. (Kyoto Univ.)

Distribution and habitat use of three closely related gobiid fishes along coastal waters of Japan.

*Uchida, K., Ushimaru, A. (Kobe Univ.)

Mechanism of decrease in herbivorous insects diversity in semi-natural grassland - Effects of changes in plant community -

<Animal life history / Animal population>

Excellent Poster

*Sahashi, G., Matsuishi, T. (Hokkaido Univ.), Morita, K. (Hokkaido Nat. Fish. Res. Inst.)

Does interspecific competition and abiotic factors change density-dependent growth of two sympatric salmonids?

*Izumi, K. (Hokkaido Univ.), Shimada, T. (FFPRI), and Saitoh, T. (Hokkaido Univ.)

Does the Japanese Wood Mouse Inherit Tannin Tolerance? -An Insight into Geographic Variation of the Physiological Trait.

Ogai, T. (Univ. Tsukuba), Kenta, T. (Sugadaira MRC, Univ. Tsukuba)

Genetic differentiation of 3 Leptocarabus beetles that inhabit different altitudinal zones in Japanese Alps.

*Takatsu, K., Kishida, O. (Hokkaido Univ.)

Offensive phenotypes of predatory salamanders select amplified defensive phenotypes of prey frog tadpoles.

<Behavior>

Best Poster

*Morii, Y. (Tohoku Univ.), Kishimoto, T. (Tsukuba Kokusai Univ.), Tojo, K. (Shinshu Univ.)

Sex-based difference in the emergence timing of two related scopurid stoneflies (Plecoptera, Scopuridae).

*Mukai, H. (Kagoshima Univ.), Hironaka, M. (Hamamatsu Univ. School of Medicine), Tojo, S., Nomakuchi, S. (Saga Univ.)

How do mother insects regulate egg temperature? Egg-rolling behaviour in a subsocial burrower bug.

Excellent Poster

*Abe, M. (Univ. of Tokyo), Horibe, N. (Discover 21), Shimada, M. (Univ. of Tokyo)

Nonlinear time-series analysis on searching behavior of parasitoid wasp and neural network model.

Jono, T. (Kyoto Univ.)

Species recognition by male courtship calls in closely-related gecko lizards.

Suzuki, T. (Rikkyo Univ.)

Great tit mobbing calls signal predator type to both parents and offspring.

*Kojima, Y., Mori, A. (Kyoto Univ.)

Do dams like toxic prey? Possible dietary shift as an indirect maternal care in a chemically defended snake.

*Yamamoto, Y., Matsuura, K. (Okayama Univ.)

Influence of symbionts on feeding behaviour in a termite.

*Yasuda, C., Takeshita, F., Wada, S. (Hokkaido Univ.)

Male hermit crabs change assessment strategy among phases during male-male contest.

Yosuke, O. (Kyoto Univ.) et al.

Ranging behavior of male Japanese macaque.

<Ecosystem management>

Best Poster

*Matsubayashi, J., Morimoto, J. (Hokkaido Univ.), Mano, T. (Hokkaido Res. Org.), Takahashi, O. (Chitose city), Nakajima, M. (Hokkaido Res. Org., Hokkaido Univ.), Nakamura, F. (Hokkaido Univ.)

Spatiotemporal analysis of salmon usage by brown bears (*Ursus arctos*) in Hokkaido, Japan.

*Naito, S., Inoue, T., Nagumo, M., Yoshida, T., Nakamura, F. (Hokkaido Univ.)

Effects of selection cutting on complexity and heterogeneity of mixed forests in northern Japan.

Excellent Poster

Osada, Y. (Tokyo Univ.), Asada, M. (Chiba Biodiv.), Kuriyama, T. (Tokyo Univ.), Tatsuta, H. (Ryukyuu Univ.) Yokomizo, H. (Natl. Inst. Environ. Stud.), Miyashita, T. (Tokyo Univ.)

A novel stochastic simulation model for predicting the spread of large wildlife.

*Miyasaka, T. (Univ. Tokyo), Le, Q.B. (ETH Zurich), Okuro, T. (Univ. Tokyo), Zhao, X. (CAS), Scholz, R.W. (ETH Zurich), Takeuchi, K. (Univ. Tokyo)

Agent-based modelling for assessing ecological and socioeconomic effects of Chinese PES policies.

<Invasive species>

Best Poster

*Fukano, Y., Yahara, T. (Kyushu Univ.)

Evolution of constitutive and inducible defenses in introduced populations of ragweed, *Ambrosia artemisiifolia*.

Excellent Poster

*Sakata, Y., Ohgushi, T., Ando, Y., Isagi, Y. (Kyoto Univ.)

Invasive herbivorous insects as selective agents to defensive traits of an exotic plant *Solidago altissima*.

*Ikegami, S. (Niigata Univ.), Funo, T. (Mus. of Nat. and Human Act., Hyogo), Sekijima, T. (Niigata Univ.)

Factors influencing habitat selection of the invasive bullfrog in Pond in Sado island.

<Plant life history / Plant population>

Excellent Poster

*Matsubashi, S. (Tohoku Univ.), Kudoh, H. (Kyoto Univ.), Maki, M. (Tohoku Univ.), Hay, A., Tsiantis, M. (Oxford Univ.), Sakai, S. (Tohoku Univ.)

Inferred invasion history of *Cardamine hirsuta* utilizing population genetic analysis.

Hayamizu, M. (Hokkaido Univ.) et al.

Intraspecific variation in life history traits of *Viola brevistipulata* (Violaceae) in Hokkaido.

<Plant reproduction / Seed dispersal>

Best Poster

*Kobayashi, M. (Zurich Univ.), Takeuchi, Y. (SOKENDAI), Tanaka, K. (Univ. Tsukuba), Shimizu, K. (Zurich Univ.)

Ecological Transcriptome Analysis of Synchronous Flowering in Tropical Rainforest.

Excellent Poster

Mizusawa, L. (Univ. Kyoto), Hasegawa, M. (Univ. Toho), Kaneko, S., Isagi, Y. (Univ. Kyoto)

Does the difference in reproductive system between the insular shrub *Clerodendrum izuinulare* and widespread *C. trichotomum* influence the degree of inbreeding depression at the germination stage?

<Landscape / Urban area>

Excellent Poster

*Mpolya, E., Yashima, K., Ohtsuki, H., Sasaki A. (Sokendai)

Vector-borne disease dynamics on rural-urban star network: a case of malaria.

*Yamanaka, S., Akasaka, T., Yamaura, Y. (Hokkaido Univ.), Kaneko, M. (Rakuno Univ.), Nakamura, F. (Hokkaido Univ.)

Do we really need landscapes history to model ground beetle distributions?

Seki, H. (Yokohama National Univ.)

Distribution of pollination service by honeybees and hoverflies in suburban landscapes.

*Mochizuki, S., Murakami, T. (Niigata Univ.)

Scale dependency in habitat selection by crop-raiding Japanese macaques (*Macaca fuscata*).

Kobayashi, S., Abe, S., Matsuki, R. (CRIEPI)

Landscape genetics of relationships among breeding sites of Japanese brown frog.

<Plant-animal interaction>

Best Poster

*Yamawo, A. (Kagoshima Univ), Suzuki, N. (Saga Univ)
Phenological asynchrony of an extrafloral nectary plant with attendance ants provides a favorable niche for a herbivore and feedbacks the plant investment strategy using multiple defense traits.

Excellent Poster

*Imada, Y., Kawakita, A., Kato, M. (Kyoto Univ.)
Allopatric distribution and diversification without niche shift in a bryophyte-feeding basal moth lineage (Lepidoptera: Micropterigidae).

Chang, F.H., Marquis, E.C. (NTU), Gong, G.C. (NTOU), Hsieh G.C. (NTU)

MICROZOOPLANKTON GRAZING IMPACT IN THE SOUTHERN EAST CHINA SEA.

*Onodera, H. Oguro, M. Sakai, S. (Tohoku Univ.)

Defense strategy on scapes in *Iris gracilipes*: relationship between amount of nutrients and defense substances and herbivory in reproductive tissues and leaves.

<Evolution>

Best Poster

Nakayama, S. (Univ. of Tokyo)

The evolution of haplodiploidy: entanglement of haploid parthenogenesis, sex determination, and deleterious mutations.

Hayashi, H., Tomaru, N. (Nagoya Univ.)

Differences in fitness traits between small and large isolated populations of *Salix arbutifolia*: maternal effects rather than inbreeding depression.

Excellent Poster

*Shimizu, K., Sarashina, I. (Tokyo Univ.), Kudoh, T. (Exeter Univ.), Endo, K. (Tokyo Univ.)

Molecular mechanisms and evolution of shell coiling in gastropods.

*Yamamichi, M., Sasaki, A. (Graduate Univ. for Advanced Studies)

Ecological speciation via pleiotropy: fixation probability of the speciation gene.

<Animal community>

Best Poster

Soga, M., Koike, S. (Tokyo Univ. Agri. Tech.)

Time-lag between landscape change and biodiversity loss: an evidence of extinction debt.

Excellent Poster

Okahisa, Y. (Rikkyo Univ.) et al.

Breeding avifauna influenced by insect abundance and lava substrate in Aokigahara primeval forest on Mt. Fuji.

*Haraguchi, T.F., Tayasu, I. (Center for Ecol. Res., Kyoto Univ.)

Food web analyses using C and N stable isotopes: spiders shift their prey from aboveground to belowground origin through secondary succession.

*Fujii, S. (Kyoto Univ.), Takeda, H. (Doshisha Univ.)

Succession of collembolan community during the decomposition of root and leaf litter: effects of litter type and litter position.

<Conservation>

Excellent Poster

Takai, K., Fukaya, K. (Hokkaido Univ.), Iwakuma, T. (Hakodate National College of Technology)

Global climate change and tree frog phenology in Japan.

Michimoto, K., Takami, Y. (Kobe Univ.), Tanaka, H. (Kyoto Univ.), Ushimaru, A. (Kobe Univ.)

Effects of urbanization on genetic structures in two paddy-associated frog species with different dispersal habits.

Yokogawa, M. (Kyoto Univ.), Takahashi, Y. (WeNARC), Isagi, Y. (Kyoto Univ.)

Can soil seed banks restore genetic diversity of critically endangered plants? Genetic status of seed bank derived populations of *Polemonium kiushianum*.

Terui, A. (Tokyo Univ.), Miyazaki, Y., Yoshioka, A., Kaifu, K., Matsuzaki, S.S. (NIES), Washitani, I. (Tokyo Univ.)

Spatial evaluation of a life-stage structured metapopulation of endangered freshwater pearl mussel in dendritic network.

<Material cycling>

Best Poster

*Kodama, D. (Niigata Univ.), Funo, T. (Mus. of Nat. and Human Act. Hyogo), Ishima, T. (Niigata Univ.), Inoue N. (Biodiversity Network Niigata), Yoshimura, C. (Tokyo Inst. Tech.), Sekijima, T. (Niigata Univ.)

The effects of seasonal ecotone on ecosystem in upper reaches of the Sagae Reservoir.

Excellent Poster

*Tomotsune, M., Anzai, T., Yoshitake, S., Koizumi, H. (Waseda Univ.)

Diurnal and seasonal variations of soil, heterotrophic and root respiration estimated by automatic open/close chamber and trenching method.

*Akiyama, S., Watanabe, K., Murazumi, K., Sugawara, T., Ueno, M., Yamashita, Y. (Kyoto Univ.)

Food habits of sympatric coastal mysids as determined by multiple methods.

*Ishii, K., Fukushima, K., Ishihara M., Yoshioka T. (Kyoto Univ.)

Soil carbon and nitrogen dynamics changes associated with vegetation recovery in a deer enclosure at a heavy grazed *Miscanthus sinensis* grassland.

Ⅲ. 書評依頼図書 (2011年9月～2012年4月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 萩原彰著「アメリカの環境教育 歴史と現代的課題」(2011) 228pp. 学術出版会 ISBN:978-4-284-10331-2

2. 田村典子著「リスの生態学」(2011) 216pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060192-4
3. 林勇夫監訳「知られざる動物の世界5 単細胞生物・クラゲ・サンゴ・ゴカイのなかま」(2011) 124pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17765-7
4. 日本陸水学会編「川と湖を見る・知る・探る 陸水学入門」(2011) 204pp. 地人書館 ISBN:978-4-8052-0838-0
5. 西川潮・宮下直編著「外来生物 生物多様性と人間社会への影響」(2001) 284pp. 裳華房 ISBN:978-4-7853-5848-8
6. 中丸麻由子著「シリーズ社会システム学④ 進化するシステム」(2011) 348pp. (株) ミネルヴァ書房 ISBN:978-623-05929-4
7. 阿部治監修・萩原彰編著「高等教育とESD 持続可能な社会のための高等教育」(2011) 178pp. 大学教育出版 ISBN:978-4-86429-067-8
8. 多田多恵子著「身近な木の実・植物の種 図鑑&採集ガイド」(2012) 128pp. 実業之日本社 ISBN:978-4-408-45371-2
9. 山田文雄・池田透・小倉剛編「日本の外来哺乳類 管理戦略と生態系保全」(2011)450pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060221-1
10. 細将貴著「フィールドの生物学⑥ 右利きのヘビ仮説」(2012) 196pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01845-2
11. 宮下直・井鷲裕司・千葉聡著「生物多様性と生態学 遺伝子・種・生態系」(2012) 178pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-17150-1
12. 川辺みどり・河野博編「江戸前の環境学 海を楽しむ・考える・学びあう12章」(2012) 234pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-066250-5
13. 中島清隆著「気候変動問題の国際協力に関する評価手段」(2012) 304pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-6763-2
14. 小島覚著「カナダの植生と環境」(2012) 284pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8202-4
15. 日本生態学会編 吉田丈人・鏡味麻衣子・加藤元海担当編集「現代の生態学9 淡水生態学のフロンティア」(2012) 272pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05737-1
16. 伊藤修一・有馬貴之・駒木伸比呂・林琢也・鈴木晃志郎編「役に立つ地理学」(2012) 168pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-8505-6
17. 小椋純一著「森と草原の歴史」(2012)344pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-8111-9
18. 日本生態学会編「生態学入門 第2版」(2012) 292pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0783-0
19. M.Cain/C.Yoon/A.Singh-Cundy 著 上村慎治監訳「ケイン 基礎生物学」(2012) 482pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0770-0
20. G.P. チェウプリック /S.H. フェイス著 大園享司訳「グラスエンドファイト その生態と進化」(2012) 298pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01920-6

IV. 寄贈図書

1. 「多摩川第132号」(2011) 16pp. 公益財団法人とうきゅう環境財団
2. 「第34回 事業報告書」(2011) 124pp. 財団法人山田科学振興財団
3. 「うみうし通信 No.73」(2011) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
4. 「財団法人下中記念財団年報」(2011) 72pp. 財団法人下中記念財団
5. 「果樹研究所ニュース No.28」(2011) 8pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所
6. 「第61回 東レ科学振興会科学講演会記録「科学技術と知の文化」」(2012) 36pp. 公益財団法人 東レ科学振興会
7. 「草と緑2」(2010) 44pp. 特定非営利活動法人 防草緑化技術研究所
8. 「草と緑3」(2011) 56pp. 特定非営利活動法人 防草緑化技術研究所
9. 「用水と廃水 3」(2012) 244pp. 産業用水調査会
10. 「多摩川 133号」(2012) 32pp. 公益財団法人とうきゅう環境財団
11. 「2011年コスモス国際賞報告書」(2012) 68pp. 財団法人国際花と緑の博覧会協会
12. 「SESSILE ORGANISMS」(2012) 40pp. 日本付着生物学会
13. 「こうえいフォーラム」(2012) 76pp. 日本工営株式会社 技術委員会
14. 「環境情報科学 40-5」(2012) 172pp. 環境情報科学センター
15. 「果樹研究所研究報告 第13号」(2012) 58pp. 農研機構 果樹研究所
16. 「果樹研究所ニュース No.29」(2012) 8pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所
17. 「うみうし通信 No.74」(2012) 12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
18. 「みどりいし 23」(2012) 46pp. 財団法人熱帯海洋生態研究振興財団

V. 交換雑誌目録 (2012年4月現在)

1. Annales Botanici Fennici
2. Archiv fur Molluskenkunde
3. Biodiversity Science
4. BREVIORA
5. British Ecological Society
6. Bulletin of the Museum of Comparative Zoology
7. Chinese Journal of Applied Ecology
8. Chinese Journal of Ecology
9. Entomologische Berichten
10. Folia Geobotanica
11. Journal of Plant Ecology
12. Journal of Taiwan Fisheries Research
13. MICRONESICA
14. ORSIS
15. Polish Journal of Ecology

16. Proceeding of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia
17. Scientia Marina
18. Sichuan Alpine Ecology Study
19. SPIXIANA
20. Systematics and biodiversity
21. The BIOLOGICAL BULLETIN
22. The Botanical Review
23. Tropical Ecology
24. ВЕСЦІ АҚДЭМ ІІ НАВУК БЕЛАРУС І
25. Хабарлары Цэвесмця

- ③応募期間：平成 24 年 5 月 1 日～8 月 31 日
- ④日本生態学会事務局（学会推薦が必要です）

書評

丹後俊郎・Taeko Becque (2011) 「医学統計学シリーズ 9 ベイジアン統計解析の実際 —WinBUGS を利用して—」朝倉書店 262pp. ISBN: 978-4-254-12759-1 定価 4800 円

生態学分野でも「ベイジアン統計（ベイズ統計）」という言葉はますます聞かれるようになってきた。これはもちろんその普及に尽力されてきた先生方のおかげであることは言うまでもないが、WinBUGS に代表される BUGS というフリーのソフトウェアが開発されたことにもその一因がある。BUGS はベイジアン統計モデルの推定を行う際に必要となるマルコフ連鎖モンテカルロ法という数値計算を自動で行ってくれるソフトウェアである。BUGS を使えば数値計算のプログラムを書く手間から解放され、利用者はベイジアン統計に使うモデルにだけ専念することができるのである。

しかし、数値計算のプログラムを書く手間から解放されたといっても、ベイジアン統計解析を適切に行うためには多くの知識が必要となる。そのため、もし独学（たとえ知り合いにベイジアン統計解析に詳しい方がいたとしても）で、ゼロからベイジアン統計解析を身につけようと思ったら、相当の苦勞を覚悟しなければならない。今回紹介する「ベイジアン統計解析の実際 —WinBUGS を利用して—」は、こうした苦勞をかなり軽減してくれる良書である。「ベイジアン統計解析の実際」という名前前から最近の文献をまとめた総説を連想してしまう方もおられるかもしれないが、本書は「読者が読者自身の考えているベイジアン・モデルを WinBUGS を利用して適用し、その結果を適切に解釈」できるようにするという目的を掲げる超実践的な内容である。

本書は「医療統計学シリーズ」の本なので医療統計からの事例が多い。ただ、そのまま生態学に適用できるものが多く、その点はほとんど気にならない。むしろ本書はさまざまな状況を想定した適用例を多く紹介しており、少数の限定された例のみを紹介する既存の類書に比べて、ずっとベイジアン統計解析の使いどころをイメージしやすいのではないだろうか。本書の適用例としては、基本的な回帰モデルはもちろん、変量効果を扱うモデル、欠損データがあるモデル、空間相関を考慮したモデルなどが挙げられる。

本書の構成は、第 1 章「はじめに」、第 2 章「ベイジアン推測」、第 3 章「マルコフ連鎖モンテカルロ法」、第 4 章「WinBUGS」、第 5 章「応用例」となっている。第 1 章「はじめに」では、頻度論的アプローチとの違いを意識しながら、ベイジアン統計の目的や考え方を紹介する。つづく第 2 章「ベイジアン推測」では、事前分布や事後分布といった、ベイジアン統計解析を行ううえで少なくとも知っておくべき知識について簡潔にまとめている。ベイジアン・モデルの重要な要素である階層的モデルや交換可能性についても一節割いて詳しく説明し

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 第 3 回（平成 24 年度）日本学術振興会育志賞

- ①大学院における学業成績が優秀であり、豊かな人間性を備え、意欲的かつ主体的に勉学及び研究活動に取り組んでいる大学院生であって、当該大学長・所属する学会長から推薦された者
- ②学業奨励金 110 万円（授賞数は 16 名程度）
- ③受付期間：平成 24 年 6 月 15 日～6 月 17 日期间中必着
- ④日本生態学会事務局（学会推薦が必要です）

(2) 南方熊楠研究奨励事業若年研究者助成事業

- ① 1) 南方熊楠自身、または熊楠の業績に関する研究
2) 南方熊楠顕彰館所蔵資料を用いた研究
- ② 2 件の総計 50 万円以内（2 年分として交付）
- ③平成 23 年 6 月 30 日
- ④〒 646-0035 和歌山県田辺市中屋敷町 36 番地
Tel: 0739-26-9909 Fax: 0739-26-9913

(3) 藤原セミナー

- ①自然科学の全分野でわが国の大学等学術研究機関に所属する常勤の研究者
- ② 1 件につき 1200 万円以内（2 件以内）
- ③ 2012 年 7 月 31 日必着
- ④〒 104-0061 東京都中央区銀座 3-7-12
公益財団法人 藤原科学財団
TEL: 03-3561-7736 FAX: 03-3561-7860

(4) 第 4 回（平成 23 年度）とうきゅう環境財団社会貢献学術賞

- ①国内における環境分野（環境保全・エネルギー・リサイクル・廃棄物など）において学術的、社会的に特に顕著な業績（調査研究・科学技術の発展・行政施策・実践活動など）を挙げた研究者。
- ②賞状および賞金 50 万円

ており分かりやすい。第3章では、ベイジアン統計解析に使われる数値計算のひとつ「マルコフ連鎖モンテカルロ法」について、特にMetropolis-Hastings アルゴリズムとGibbs サンプリングを説明する。BUGS を使うと自動的によりよい数値計算法を選んでくれるので、著者がいうように興味のない方は「読み飛ばして」もよいが、うまく推定されない際にその原因のひとつにもなるので読んでみるといいだろう。第4章では「WinBUGS」を単独で利用する方法について説明する。実際には他のソフトウェアを経由してWinBUGS を使うことが多いが、それでもBUGS と呼ばれる言語を用いたモデルの書き方、トラブルシューティング、数値計算の収束を改善するためのコツなど、この章には参考になる内容が非常に多い。特にWinBUGS のトラブルシューティングや収束の悪さに悩まされている方にとって、この章だけでも読む価値があるだろう。最後の第5章は「応用例」である。実は本書の半分はこの最終章に割かれており、豊富な適用例が紹介されている。この章では、モデルの説明だけでなく、すべての例でWinBUGS のコードとその解説を行っている（ウェブサイト上でデータを含めたコードをダウンロードできるのも有難い）。もしWinBUGS を用いてベイジアン統計解析を始めたいという方がおられるなら、この章を読んで自分の考えているモデルに近いものを探し、それをもとにして拡張していくとよいだろう。またWinBUGS の使い方を習熟している方もこの章を読めば、扱えるモデルの範囲が広がることは間違いない。本書を読んでひとつ残念なことは、モデルの適合度についての説明が半ページと非常に少ないことだ。しかし本書は限られたページ数の中にベイジアン統計解析のエッセンスをぎゅっと詰め込んでいるので仕方がないのかもしれない。むしろベイジアン統計解析の文献で良く引用されるGelman et al. (2004) “Bayesian Data Analysis” が辞書並みに分厚いことを考えると、その3分の1ほどのページ数で実践的な形にまとめきっている本書は称賛に値する。

本書は、確率分布の数学的な表現に不慣れな方にとっては少し読みにくいかもしれない。しかし、ぜひそういう方にも数式を読み飛ばさず頑張って読んでほしい。その理由は二つある。ひとつは本書を超えてさらにベイジアン統計解析について勉強する際に避けて通れないものであるからである。そして、もうひとつはモデルを構築する際にも確率分布の数学的表現を書きおろさなくてはならない場合があるからである。

さまざまな状況に柔軟に対応できるベイジアン統計解析は、習得すれば研究の大きな武器になり、ベイジアン統計解析を身につけたいという方が増えているのは自然の流れだ。ゼロからベイジアン統計について学びたい方、ベイジアン統計のさまざまな適用例について知りたい方にとって、本書はまさにうってつけの本である。

(長田穰)

鹿児島環境学研究会編 (2009 - 2011) 『鹿児島環境キーワード事典』『鹿児島環境学 I, II, III』南方新社 本体価格各 2000 円

「鹿児島環境学シリーズ」の4冊である。鹿児島大学の若手研究者を中心とし、マスコミ関係者や県庁職員などがワーキンググループを作って、「体系的な地域環境学を模索」して活動してきた成果だという（『鹿児島環境キーワード事典』の「まえがき」による）。評者の同僚も参加しているが、今までその活動内容をよく知らずにいたので、書評依頼を見かけたのを機に読んでみることにした。対象地域を鹿児島県内に限定している本なので、日本の他地域に住んでいる人にとっての意義を中心に評していきたい。

まず、『鹿児島環境キーワード事典』は、「まえがき」によると「鹿児島環境学の基礎資料としての役割を果たし、とりわけ環境問題の基礎を学ぶための入門書として」編まれたものだという。帯のコピーの「これだけは知っておきたい100の基礎知識」が示すように、鹿児島県の環境についての事項100項目について、見開き2ページずつの解説が書かれている。100項目は以下の9つのカテゴリーに分けられている。(1) 鹿児島の環境特性の概要(8項目)、(2) 地域の自然(23項目)、(3)、希少な野生動植物(12項目)、(4) 外来生物(7項目)、(5) 水環境(7項目)、(6) 大気環境(10項目)、(7) 地域の課題(16項目)、(8) 地球温暖化対策(9項目)、(9) 産業と環境(8項目)、である。鹿児島県は奄美群島(=奄美諸島:後述)などの島嶼部を含めると南北600kmの範囲におよび、屋久島(標高1936m:九州~沖縄の最高峰)・霧島(1700m)など多数の山岳を擁し、屋久島と奄美の間には生物地理学で重要な分布境界線「渡瀬線」を含み、気候も北から南へ温帯から亜熱帯へと変化する(カテゴリー1)。このため、多様な生態系と生物地理学的に興味深い生物相を持つ(カテゴリー2・3)。このように本書の前半は日本南部の温帯から亜熱帯への移行部の自然を俯瞰する解説としても読むことができるだろう。日本で一番長い都道府県は小笠原諸島などを含む東京都で南北1000km以上に及ぶが、東京都の場合は本土部が小さく、しかも本土部と島嶼部の間に他県が挟まっているので、都内だけでは生態系の連続的な変化を見ることはできない。島嶼部のノイヌ・ノネコ・マンガース・ノヤギなどの外来種は、日本の他地域にも共通する問題である(カテゴリー4)。カテゴリー5から9では、鹿児島県における地域的な環境問題が網羅的に扱われており、他地域において同様な問題を考える際に参考になるだろう(例としてアジア大陸部由来の黄砂や光化学オキシダントの問題など)。巻末には47都道府県の順位を示す形で30種の統計データが示されており、鹿児島県だけでなく任意の県の環境の特性を把握するのに便利である。ひとつ文句を言わせてもらおうと、各項目の執筆者が示されていないのはいかなるものか。著者の多くは研究者であると思われるので、書いた内容に責任を持つために項目ごとに執筆者を示すべきではなかったかと思う。

『鹿児島環境学 I, II, III』は各種の論説とインタビュー・

講演録などからなり、論説では引用文献も多数示され、学術的な文献として価値が高いものが多い。もちろん各編の著者も示されている。おもな対象地域は、Iでは鹿児島県全域、IIでは奄美、IIIでは徳之島である。このように奄美群島に大きな比重を置いているのが本シリーズの最大の特徴である。屋久島や鹿児島県本土、南西諸島のうち沖縄県に属す島々に比べると、奄美群島について過去に出版された環境・自然史関連の学術書は少ないのではないか。本シリーズのうち、特に『鹿児島環境学 II, III』は、今後奄美群島の環境・自然史研究についての基本文献になるかもしれない。以下、『鹿児島環境学 I, II, III』について個別に評していく。

『鹿児島環境学 I』は、鹿児島環境学の位置づけを論じる総説、屋久島と奄美を論じる地域論、さまざまな切り口（自然史・ジャーナリズム・観光・環境行政・環境教育）から鹿児島を論じる各論という3章から構成される。本書の具体的な対象地域は鹿児島県内にほぼ限られるが、自分たちが暮らす（研究者の立場だと所属機関が存在する）地域に根ざして環境問題を考えるという本書の基本的立場には普遍性があり、どこに住んでいる読者にとっても参考になるところがあるだろう。ただ、「総説、屋久島論ほか」という副題は、本書の内容を表すのに適切だとは思えなかった。全部で201ページの本の中で「屋久島論」という節は13ページしかない。もちろん本書の他の部分にも屋久島はたびたび登場し、おそらく地名としては一番多く出てくると思うが。一方、おもに奄美群島を扱っている『鹿児島環境学 II, III』（ともに約280ページ）では、それぞれ本書よりも多い23ページ、22ページが屋久島に関する論説に割かれている。本を売るための宣伝文句として屋久島を副題に入れるのは効果的かもしれないが、中身とのギャップを知った読者は騙されたような気がするかもしれない。第2章の地域論では本土部は全く扱われておらず、すでに世界自然遺産に登録された屋久島とその候補地である奄美だけが扱われる。なので、第2章は「世界遺産論」としたほうが内容にあっており、これを本書の副題に入ればよかったのではないかと思う（そうすると副題は「総説、世界遺産論ほか」となる）。

『鹿児島環境学 II』の副題は「奄美を世界遺産へ、その課題と展望」である。この副題ずばりの内容については、「世界自然遺産への道のり」（山本麻衣）という章で、奄美地域の世界自然遺産登録にかかわった環境省の担当者が要領よくまとめている。本書全体としては、「まえがき」にあるとおり、「奄美の森や大地、水と海、動植物、農業、文化、教育など、・・・奄美の自然や社会がもつ豊かさとその抱える課題について、・・・多方面から集約的に論じて」（・・・部分は評者が略した）いるもののだといえよう。生態学に関連する論説としては、「奄美群島の植物」（宮本句子）、「マングースと外来種問題」（鏑雅哉）、「奄美諸島の地形を読む」（井村隆介）、「奄美群島における海と陸の境界線からの景観」（河合溪）、「薩摩博物学と奄美」（高津孝）、「奄美の国立公園像」（田中準）などがあって、いずれも充実した内容であり、シリーズ中では本書が一番「生態学的」である。なお、奄美には

国立公園はあるが国立公園はまだ存在しない。その国立公園も海岸域が中心で、アマミノクロウサギなどが住む森林はほとんど含まれない。世界自然遺産に登録されるには「世界遺産にふさわしい資質を有する自然が、完全に守られていること」が必要であり、そのためには国立公園に指定されることが望ましい。国立公園では自然保護のために行方規制をかけるので、森林のほとんどが民有林である奄美では、土地所有者の理解を得ていくことが不可欠である。

『鹿児島環境学 III』は、奄美の中の徳之島に焦点をあてる。徳之島は奄美群島の中で奄美大島に次いで大きい島で、石垣島や西表島に匹敵する面積を持つ。最高峰は標高645mの井之川岳で奄美・琉球諸島全体の中で奄美大島（最高は湯湾岳の694m）に次いで高い（なお、トカラ列島には奄美大島より高い島が2つある）。島面積の5割を占める森には、奄美大島と徳之島にしかいないアマミノクロウサギが住む。世界自然遺産候補地の奄美・琉球諸島として、環境省が奄美大島・沖縄島北部・西表島とともに徳之島を検討していることが最近報じられたように、徳之島は豊かな自然を持つ。それぞれ個性のある奄美の主要5島（あと3島は喜界島・沖永良部島・与論島）のうち、シリーズ最後を飾る本書の主題がなぜ徳之島なのか。その理由は、シリーズを編集した鹿児島大学の研究者たちが、2010年に米軍普天間基地移設問題が持ち上がったことに対し、「なんらかのメッセージを送るのが地域の大学としての義務」と考えたことだという。そのような「政治的」動機で編集された本書だが、「徳之島の植物」（宮本句子）、「2010年の奄美水害による住居干渉への影響から考える人と自然の「共生」」（河合溪）、「2011年霧島新燃岳噴火と霧島ジオパーク」（井村隆介）など、生態・自然史関係の論説も含まれる。個人的には奄美「群島」という呼称に違和感を持ったので、「奄美群島部分の地域名称とその経緯」（水谷知生）が興味深かった。

まとめると、本シリーズ4冊は鹿児島という特定の地域を扱ったものであるが、日本の他地域の人にとっても十分意義のあるものになっていると感じた。特に多数の島嶼・温帯から亜熱帯への移行部・世界自然遺産などの特性を共有する沖縄、伊豆・小笠原諸島、白神山地や知床などで研究している人にとっては、自分の研究対象を客観的に見直す比較対照の材料として役に立つと思う。なお、本シリーズの発行元の南方新社は、鹿児島市という九州の地方都市にあって、鹿児島県を中心としながらも、九州全体や小笠原についても、生物・自然・環境関係の良書を出版しており、これらの地域で現地調査を行う際には頼りになる出版社である。特に動植物の写真図鑑を多数出版しており、評者はどれも重宝している。

（相場慎一郎）

宮内泰介編（2009）「半栽培の環境社会学—これからの人と自然」昭和堂 257pp. ISBN-13: 978-4812209349 定価2500円（税別）

タイトルにある「半栽培」という文字と、表紙にある「蛙

に列をなしてイネを採食するサル」の衝撃的な写真に引かれて本書を読むことにした。

本書は編者が代表の科学研究費基盤研究 (B)「半栽培 (半自然) と社会的しくみについての環境社会学的研究」(2005 ~ 2007) の研究会の概要と記録を伝えるため書かれたものである。科研費研究への参加研究者の研究テーマのなかから 10 個の具体的事例を通して「半栽培」の (多様な) 考え方を紹介している。全体を通して、一般の読者にわかりやすい言葉の使用で、用語の説明も加えながら、簡潔に要約された学術的成果を記してある。

評者は環境社会学、人類学や民俗学などの研究者ではないが、兼業農家で育ち現在も多少なりとも米作りや、ある程度「半栽培」を利用した生活を経験している立場から本書を紹介するので、専門家向けのコメントではない。従って、関連する専門用語や概念 (例えば、「コモンズ」や「ドメスティケーション」など) の使用は避け、日常の言葉のみ使用する。また、あとがきに「多彩なバックグラウンドを持った者たちが共同作業した成果でもあり、またそのことによって少しでも今後の自然環境をめぐる政策論に寄与できればと思っている。」と、あるように、この書評も多様な分野に関わるものを、無理に整理したりするよりも、「半」状態のままのほうが良いのではと思う。

この本の論点は編者の宮内泰介氏による序章における以下の言葉にある

「今後の環境保全はどうあるべきか、というのは、実は、私たちが歴史を踏まえながら今後どう自然とつながっていくのか、ということとほぼ同義である。そして、そのことは、私たちがどういう社会を作っていくのかということと密接に結びついている。自然との関係が社会のあり方を規定し、社会のあり方が自然との関係を規定する。そう考えたときに、「自然のままにしておくのか、それとも人間が積極的に手を加えるのか」といった不毛な対立ではない、別の道筋を、本書では半栽培という概念を手がかりに提案してみたい。」

すなわち、「野生か栽培か、自然か人工か、所有かオープンアクセスか等の二元論を超えて、自然との関係社会との関係の「間」に位置する環境問題や生活問題に向き合うことの重要性を様々な事例を通して考察する内容である。

本書の構成は、序章「半栽培」から考えるこれからの環境保全—自然と社会との相互作用」で基軸になる半栽培の 3 つの概念、栽培化 (中尾佐助の提唱する意味での半栽培)、生育生息環境 (ハビタットの改変)、人間の認知の改変という考え方を説明し、第 1 部「多様な関係としての半栽培」(第 1 章—第 4 章) で、半栽培の多様なバリエーションを紹介し、第 2 部「半栽培とこれからの自然管理」(第 5 章—第 10 章) で、一元的価値に基づく管理ではなく、順応的管理、弱い管理の重要性を論じている。各章は、見出し、題目、副題が表示されていて概要がとらえやすく工夫されている。第 3 章と第 10 章でヨシについての話が重なることもあるが、「もの」ではなく、「こと」に沿って整理していく構成のためであろう。

以下に各章について簡単に見ていく。

第 1 章 [生態系サービス]、「半栽培と生態系サービス—私たちは自然から何を得ているか」では、アグロフォレストリー、コウノトリの野生復帰、サンゴ礁などを事例として半栽培のひとつの意義を、生態系サービスを維持、向上させる手法であるという視点からとらえている。

第 2 章 [変動]「揺れ動く竹の半栽培—たけのこ産地はモウソウチクの繁殖力とどのようにつきあってきたか」では、半栽培の意義を北九州の合馬のモウソウチクと住民の生活との関係を例に竹林の成長と、野生化と栽培化のなかを揺れ動くその管理方法の歴史的経緯を通して、探っている。

第 3 章 [生業]、「生業と半栽培—河口域のヨシ原はどのように維持されてきたか」では、北上川河口域のヨシ原管理を中心に自然資源管理の独自性や多様性とその変遷を例に、生計を立てる為の「生業」との意味合いからとらえている。

(この地域は、3.11 の津波で壊滅的な被害を受け、多くの人命を失っている。)

第 4 章 [里山]、「アフリカの里山—熱帯林の焼畑と半栽培」では、焼き畑を利用した「畑の循環」や「森林循環」としての作物の利用や管理としての半栽培の意味を示している。

第 5 章 [多様性]、「半栽培の多様性と社会の多様性—順応的な管理へ」では、半栽培と呼応した社会的しくみとして管理形態の多様性や変遷が、第 2 部の各章で語られることに向けて整理されている。

第 6 章 [所有]、「半」の思想—不完全な資源の不完全な所有と不完全な管理」では、「半」状態でものごとに対することの効用が様々な事例で示されている。

第 7 章 [規範と制度]、「半栽培とローカル・ルール—きのこつきあう作法」では、山のものとして本質的に無主物であるきのこを、完全に管理するのではなく、自然な状態を取り込んだ半栽培生物として扱うことの合理性を示される。

第 8 章 [物語]、「半栽培の「物語」—野生と栽培の「あいだ」にある防風林」では、北海道防風林の在り方や所有に関する歴史的、文化的、社会的過程が議論されている

第 9 章 [獣害管理]、「半栽培と獣害管理—人と野生動物の多様なかわりにむけて」では、下北半島のニホンザルによる猿害やその対策問題を通して、住民のコントロール不能な猿との付き合い方、向き合い方のゆらぎを報告している。

第 10 章 [住民参加]、「半栽培から住民参加へ—琵琶湖のヨシをめぐる住民活動から」では、一様な管理体制でなく古来の多様な管理形態の復権や地域の生活向上を軸とした様々な形態の在り方の重要性が主張されている。

いくつか事例に関する自分の身近なことがらを挙げてみる。

モウソウチクは私自身も自家用として非常によく利用する半栽培の植物である。現在、荒れた放置竹林が目

につくが、原因はいくつか考えられる。ひとつは、竹はもともと農作業に欠かせないものであるが、田んぼの面積を増やすために、農地の傍ではあるが耕作地として利用に適さない山の斜面や高い場所など不便なところに植えられていたため簡単に手入れを行いにくいという理由であろう。

以前は、秋に竹林の手入れをし、伐採した竹は冬場に苗代や畑で使用するために加工することが常であったが、米作りなどへの竹の使用が無くなってきたためもあり、放置され野生化している。また、自家用として多量にタケノコを食べれば手入れもするであろうが、百姓でも容易に様々な食品を入手可能になったため、農繁期と収穫期が重なるタケノコを取らないため、ますます荒れていくことが考えられる。今でも、近くの山には、先人が植えたのであろう、タケノコの収穫時期が異なる唐竹やネマガリタケもあり、4-7月まで収穫を楽しめる。

シイタケとナメコは、強風で倒れたコナラやクスギなどの広葉樹を雑木林から切り出してきて菌を植え付け、竹林や杉林の適当な場所で生息させている。元々環境に影響が大きくタイトにコントロールできるものと思っておらず、たくさん取れたらもうけものという感覚である。野生のキクラゲ、ハナビラニカワダケよりは栽培的であるが、山で取れるヒラタケ（最近では毒性も指摘されているが）などのほうが毎年確実に多く収穫できるほどである。

私の居住地域では、サルによる害こそないが、ここで記されている住民の声は共感できる。手をかけず、たくさん実る半栽培に近い状態のカキをタヌキが食べにくることは、親近感こそ感じ腹は立たないが、比較的手間がかかり収量も多くないイチゴやスイカをタヌキやハクビシンに取られることは非常に腹立たしく感じるものである。それが、明日収穫してやろうと思っていた前日に横取りされることが多いからなおさらである。さらに、タヌキやハクビシンなら対策も考えられるが、もし本書にある写真のような「畦に列をなしてイネを採食するサル」のような光景が自分の田んぼで生じたとしたらどう対処するであろうか。「あきらめの境地」に至ることも容易に想像される。

一方、以前はタヌキ汁、兎汁を食べたり、剥製を作ったりしていたのでお互い様という一面もあった。

また、私がよく利用する古い家は、(トタンで覆ってはいないが)藁ぶき屋根であったり、農作業場などの土壁の小舞(下地材)として萱が使われている。これらを特に手入れすることなく使用しているので、生活の基盤におけるヨシ原の重要性は実感できる。

さらに、私自身の日常に目を向けると、普段気には止めないが、多くの半栽培があることに気づく。典型的なものとして、ミョウガ、ミツバ、山椒などは、小川のワキや民家の周りに自生し、面積や手間を取らず、食用に利用している。これらの植物のある場所は、周辺に民家が無い場所でも以前はその地域に人が住んでいた痕跡だと思ってい。

さらに、山から移植したものに、ギョウジャニンニク、タラノメ(タラの木)、ヤマウド、ミズなどがあり、全

く手をかけずに季節ごとに味を楽しむことができる。ドクダミも薬用に使っている。また、里山のゼンマイやカタクリも誰のものということのない無主物であり食用にするし、ホオ葉も利用している。その際、自由に採取するわけだが、採取方法などに山をダメにするようなことのない“緩いルール”ともいえる「半」精神が存在する。そして、その行為が山や生物に対しては、“弱い攪乱”を与えていることになる。海岸においても、磯魚釣り同様で、イゴ、アオサ、岩ノリ、ギサバ、オカヒジキなどの海藻を自由に取るが、自家用に使う分だけなので問題が起こることは考えられない。農村地域の人口がその地域の環境容量を超えていない場合うまくいくという感じもするが、どうであろうか。

一方で、ローカルルールを(意識的・無意識的に)守らないよそ者による問題も忘れてはならない。資源の枯渇のみならず、山火事や釣り場の環境汚染を引き起こすこともある。

上記の様に、現在においても、意識せずとも半栽培は日常生活に入り込んでいる。里山のタケノコの例にも当てはまるが、全ての山には所有権があるが、その採取に関しては、「土地所有」に関しては「所有」自体はある程度明確になっているが「境界」はあいまいなまま利用するケースも多く残っている。これらが社会の中で機能しているのは、序章や第6章にもあるように、「半栽培」的思想が存在していることによると思う。広く言えば、これは、利己と利他の二元論、生と死の二元論を超えた思想になじんでいることと関わり、本書のオビにもある「自然か/人間かの二元論を超えて」という点に通ずるものがあるといえる。

半栽培は、生業や収入源という意味もあるが、セーフティーネットであるという要素も含めて、そこで生活することの精神的豊かさの背景になるのかもしれない。

本書では、生業としての葦焼についての記述があったが、一般に焼畑やひいてはマタギの文化なども「半」という精神に通底するものがあると思う。そこそこの手間を掛けて、まあまあ収穫を得ることができる豊かな文化であるといえる。本書と同じように、研究プロジェクトの成果をまとめた最近の書「佐藤洋一郎監修 焼畑の環境学：いま焼畑とは 思文閣出版(2011)」を合わせて読むことも参考になろう。

繰り返しになるが、日常に垣間見える「ものごと」の一端を半栽培という概念を軸に見るという研究成果を、平易な言葉で表現しているので、専門家や研究者よりも、むしろ農業者や比較的田舎者に読まれるべき良書であると思う。最後に、本書の中で表示されている写真は表紙の数枚を除いてはモノクロであるが、編者宮内 泰介氏のHP

<http://miya.let.hokudai.ac.jp/modules/tinyd3/content/index.php?id=1>

では、当時の研究会で使用された原稿がみられ、その中に迫力の伝わるカラーの画像をみることができる。その中のpdfファイルの原稿も参照しながら本書を読むことを勧める。

(山田物理学研究所 山田弘明)

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2011年締切 (*印：2012年締切)
研究・活動助成	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	1月13日*
藤原賞	財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	1月31日*
自然科学研究助成	財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2月 3日*
研究援助	財団法人 山田科学振興財団 http://www.yamadazaidan.jp	2月29日*
コスモス国際賞 環境問題研究助成	花の万博記念コスモス国際賞委員会 財団法人 日本生命財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4月 1日* 4月 9日*
長期自主研究	社団法人 日本化学工業協会 http://www.j-lri.org/	4月30日
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-bionom.htm	5月11日*
学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/index.html	4月20日*
育志賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html	6月15日*
若年研究助成事業	南方熊楠顕彰会・田辺市 http://www.minakata.org	6月30日*
フィールド科学賞	信州大学山岳科学総合研究所 http://ims.shinshu-u.ac.jp/	7月 2日*
研究調査助成	財団法人 日本証券奨学財団 http://www.jssf.or.jp	8月 5日
社会貢献学術賞	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	8月31日
朝日賞	財団法人 朝日新聞文化財団	8月31日
尾瀬賞	財団法人 尾瀬保護財団 http://www.oze-fnd.or.jp/	8月31日
記念基金助成	日本万国博覧会記念機構 http://fond.expo70.or.jp/valuation/explanation.html	9月30日
沖縄研究奨励賞	沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9月30日
木原記念財団学術賞	木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
調査研究・技術開発助成	海洋博覧会記念公園管理財団 http://www.kaiyohaku.jp	9月30日
助成事業	花博記念協会 http://www.expo90.jp	11月14日
環境研究総合推進費	財団法人 日本環境衛生センター http://www.env.go.jp/policy/kenkyu/	11月14日
研究助成	財団法人 鹿島学術振興財団 http://www.kajima-f.or.jp/	11月20日
研究助成	財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12月10日*
高木仁三郎市民科学基金	特定非営利活動法人 高木仁三郎市民科学基金 http://www.takagifund.org	12月10日

日本生態学会役員一覧

会長	松田 裕之	2012.1 ~ 2013.12
次期会長	齊藤 隆	2014.1 ~ 2015.12
幹事長	高田 壯則	2011.1 ~ 2012.12
庶務幹事	工藤 岳	2011.1 ~ 2012.12
会計幹事	小泉 逸郎	2011.1 ~ 2012.12
会計監事	石田 厚	2011.1 ~ 2013.12
	大澤 晃	2012.1 ~ 2014.12

全国委員会 (2012.1 ~ 2013.12)

全国区	占部 城太郎	大手 信人
	粕谷 英一	可知 直毅
	加藤 真	工藤 岳
	酒井 章子	佐竹 暁子
	嶋田 正和	竹中 明夫
	仲岡 雅裕	中静 透
	宮竹 貴久	矢原 徹一
	湯本 貴和	
地方区	野田 隆史 (北海)	黒川 絃子 (東北)
	西廣 淳 (関東)	津田 智 (中部)
	丑丸 敦史 (近畿)	鎌田 磨人 (中四)
	相場 慎一郎 (九州)	

常任委員会 (2012.1 ~ 2013.12)

常任委員	足立 直樹	池田 浩明
	原 登志彦	半場 祐子
	日浦 勉	中野 伸一
	湯本 貴和	

会長 (松田)、幹事長 (高田)、次期会長 (齊藤)、ER 編集委員長 (可知)、生態学会誌編集委員長 (鈴木)、保全生態学研究編集委員長 (角野)、将来計画専門委員長 (辻)、自然保護専門委員長 (矢原)、生態教育専門委員長 (西脇)、大会企画委員長 (陀安)、庶務幹事 (工藤)、会計幹事 (小泉)

Ecological Research 編集委員会 (2011.1 ~ 2013.12)

編集委員長	可知 直毅
Managing Editor	鈴木 準一郎

Associate Editors in-Chief

佐竹 暁子	河田 雅圭
福井 学	久保田康裕
正木 隆	宮下 直
大手 信人	野田 隆史
寺島 一郎	李 博

Assistant Editor

石井 博

Handling Editors

伴 修平	江口 和洋
原 正利	長谷川雅美
日野 輝	半場 祐子
市岡 孝郎	岩田 智也
梶 光一	菊沢 喜八郎
木庭 啓介	工藤 岳

久米 篤	松尾奈緒子
仲岡 雅裕	大塚 俊之
佐藤 一憲	清和 研二
関島 恒夫	陶山 佳久
瀧本 岳	梅木 清
金子 信博	日浦 勉
藤卷 玲路	高橋 耕一
Michael Boots	Barry W. Brook
Min Cao	Jae Chun Choe
Franck Courchamp	Stuart J Davies
Tom J. de Jong	Jingyun Fang
Raghavendra Gadagkar	Rhett D. Harrison
Sun-Kee Hong	Bas W. Ibelings
David W. Inouye	Kari Klanderud
Simon A. Levin	Mathew A. Leibold
Mark D. Scheuerell	Erling J. Solberg
Janne Sundell	Ping Xie
Hoi Sen Yong	Niels. P.R. Anten
Yunting Fang	Jan Frouz
Andrew Lohrer	Zhijun Ma
Andrew Lohrer	Zhijun Ma
Stephen D. Sebestyen	

日本生態学会誌編集委員会 (2011.1 ~ 2013.12)

編集委員長	鈴木 英治	
編集幹事	船越 公威	富山 清升
	川西 基博	
編集委員	池田 浩明	大塚 俊之
	沖津 進	古賀 庸憲
	市岡 孝朗	辻 和希
	中丸 麻由子	小林 剛
	鎌田 直人	津田 みどり
	井鷲 裕司	田中 健太
	北出 理	白川 勝信
	土田 浩治	岩本 俊孝
	村岡 裕由	永光 輝義
	相場 慎一郎	和穎 朗太
	島野 光司	崎尾 均
	磯谷 達宏	

保全生態学研究編集委員会 (2012.1 ~ 2014.12)

編集委員長	角野 康郎	
編集幹事	西廣 淳	三橋 弘宗
編集委員	井口 恵一朗	石井 実
	石濱 史子	井上 幹生
	植田 睦之	梅原 徹
	加藤 真	角谷 拓
	河口 洋一	倉本 宣
	小池 文人	小池 裕子
	高田 まゆら	高槻 成紀
	館野 正樹	中越 信和
	長谷川雅美	早矢仕有子
	藤井 伸二	増田 理子
	山本 智子	湯本 貴和

横溝 裕行 横山 真弓

自然保護専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)
 委員長 矢原 徹一：外国渉外
 副委員長 加藤 真：海洋
 幹事 井田 秀行：中部
 地区委員 露崎 史朗：北海 紺野 康夫：北海
 竹原 明秀：東北 東 信行：東北
 川上 和人：関東
 吉田 正人：関東・自然公園
 和田 直也：中部 角野 康郎：近畿
 岩崎 敬二：近畿 井上 雅仁：中四
 大田 直友：中四 逸見 泰久：九州
 伊澤 雅子：九州

専門別委員
 増沢 武弘：高山・亜高山・MAB
 竹門 康弘：陸水
 清水 善和：島嶼
 久保田 康裕：熱帯・亜熱帯
 横畑 泰志：寄生生物
 陶山 佳久：遺伝子
 三浦 慎吾：鳥獣管理
 竹中 千里：大気汚染
 村上 興正：環境行政
 立川 賢一：エコツーリズム
 安溪 遊地：エネルギー問題

将来計画専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)
 委員長 辻 和希
 巖佐 庸 奥田 昇
 粕谷 英一 五箇 公一
 酒井 章子 佐竹 暁子
 田中 健太 仲岡 雅裕
 中丸 麻由子 野田 隆史
 松木 佐和子

生態学教育専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)
 委員長 西脇 亜也
 山村 靖夫 浅見 崇比呂
 嶋田 正和 畑田 彩
 平山 大輔 牛丸 敦史
 広瀬 祐司 中井 咲織
 亀田 佳代子

大規模長期生態学専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)
 委員長 日浦 勉
 伊東 明 大手 信人
 黒川 紘子 三枝 信子
 柴田 英昭 鈴木 智之
 仲岡 雅裕 中村 誠宏
 正木 隆

生態系管理専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)
 委員長 竹門 康弘：河川
 副委員長 津田 智：草原

幹事
 西廣 淳：湖沼
 村上 興正：自然保護
 中越 信和：景観生態
 鎌田 磨人：森林・河川
 高村 典子：湖沼
 角野 康郎：水域
 日鷹 一雅：水田・農耕地
 波田 善夫：湿地
 神田 房行：湿地
 國井 秀伸：汽水・河口
 佐藤 利幸：高山
 矢原 徹一：保全生物学
 中村 太土：河川
 立川 賢一：海洋
 古賀 庸憲：海洋
 椿 宜高：個体群
 塩坂 比奈子：普及
 逸見 泰久：海洋
 山田 俊弘：森林
 谷内 茂雄：管理モデル
 鹿野 雄一：河川生態学
 富田 涼都：環境社会学

日本生態学会賞・宮地賞・大鳥賞選考委員会

宮竹 貴久 2010.7 ~ 2012.12
 谷内 茂雄 2010.7 ~ 2012.12
 吉田 丈人 2010.7 ~ 2012.12
 粕谷 英一 2011.6 ~ 2013.12
 酒井 章子 2011.6 ~ 2013.12
 綿貫 豊 2011.6 ~ 2013.12

大会企画委員会

委員長 陀安 一郎 2011.4 ~ 2014.3
 副委員長 久米 篤 2012.4 ~ 2015.3
 運営部会 畑田 彩 2009.4 ~ 2013.3
 川北 篤 2010.4 ~ 2013.3
 難波 利幸 2005.1 ~ 2013.3
 竹中 明夫 2005.1 ~ 2013.3
 大澤 剛士 2011.4 ~ 2013.3
 唐 艶鴻 2011.4 ~ 2014.3
 北村 俊平 2011.4 ~ 2014.3
 森長 真一 2011.4 ~ 2014.3
 黒田 宏行 2012.4 ~ 2015.3
 三木 健 2012.4 ~ 2015.3
 関野 樹 2012.4 ~ 2015.3
 津田 智 2012.4 ~ 2013.3
 遊磨 正秀 2012.4 ~ 2013.3
 山内 淳 2012.4 ~ 2013.3
 広報部会 可知 直毅 2009.4 ~ 2013.3
 シンポジウム部会
 石田 清 2011.4 ~ 2014.3
 鈴木 牧 2012.4 ~ 2015.3
 松浦 健二 2009.4 ~ 2013.3
 保原 達 2009.4 ~ 2013.3

島野 光司	2009.4 ~ 2013.3	浅見 崇比呂	2012.4 ~ 2014.3
半谷 吾郎	2010.4 ~ 2013.3	中井 咲織	2012.4 ~ 2014.3
瀧本 岳	2010.4 ~ 2013.3	山下 雅幸	2012.4 ~ 2014.3
稲垣 善之	2011.4 ~ 2014.3	発表編成部会	
竹垣 毅	2011.4 ~ 2014.3	小南 陽亮	2011.4 ~ 2014.3
村岡 裕由	2012.4 ~ 2015.3	永松 大	2011.4 ~ 2014.3
佐藤 一憲	2012.4 ~ 2015.3	亀田 佳代子	2010.4 ~ 2013.3
松村 俊和	2012.4 ~ 2015.3	大澤 剛士	2010.4 ~ 2013.3
岩崎 亘典	2012.4 ~ 2015.3	大園 享司	2010.4 ~ 2013.3
安部 淳	2012.4 ~ 2015.3	遠藤 千尋	2012.4 ~ 2015.3
長谷川 功	2012.4 ~ 2015.3	藤卷 玲路	2012.4 ~ 2015.3
ポスター部会			
近藤 倫生	2010.4 ~ 2013.3	野外安全管理委員会 (2012.4 ~ 2014.3)	
下野 嘉子	2011.4 ~ 2014.3	委員長 鈴木 準一郎	
谷 友和	2010.4 ~ 2013.3	大館 智志	粕谷 英一
岸田 治	2010.4 ~ 2013.3	飯島 明子	石原 道博
富田 基史	2011.4 ~ 2014.3		
衣笠 利彦	2011.4 ~ 2014.3	キャリア支援専門委員会 (2012.4 ~ 2014.3)	
岡田 賢祐	2011.4 ~ 2014.3	委員長 半場 祐子	
山浦 悠一	2011.4 ~ 2014.3	池田 浩明	坂田 剛
丸山 敦	2012.4 ~ 2015.3	村岡 裕由	三宅 恵子
富田 瑞樹	2012.4 ~ 2015.3	深谷 肇一	石塚 航
和田 直也	2012.4 ~ 2015.3	飯島 勇人	
高校生ポスター部会			
嶋田 正和	2012.4 ~ 2014.3		



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2012 (平成 24) 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2012年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

2008年度から始まった「生物多様性を促進する生物間相互作用ネットワークゲノムから生態系まで—(研究代表者: 高林純示)(日本学術振興会先端拠点事業—拠点形成型—)、2010年度から始まった「遺伝子発現の季節解析にもとづく植物気候適応の機能解明と予測技術開発」(研究代表者: 工藤洋)(総合科学技術会議最先端次世代研究開発プログラム)などの大型共同研究が進められている。また、流動連携機関である総合地球環境学研究所との共同企画プロジェクト(1件)、地球環境研究総合推進費による共同研究(2件)、科学研究費補助金による研究(28件)、民間財団寄付金による研究(7件)も進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員(Affiliated Scientist)を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業(次頁の表を参照)

2012年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点から、9件の共同研究、5件の研究集会・ワークショップを採択した。開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度(第三金曜日)センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室(会場への道順は、センターのホームページ参照)の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回(7月、11月、3月)発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、水の酸素・水素同位体比分析前処理装置(水平衡装置)と GC/C(ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)を装備した安定同位体比質量分析計 MAT252 と、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置(元素分析計)を装備した安定同位体比質量分析計 delta S、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置(元素分

析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置(熱分解型元素分析計)、GC/C(ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、LC/C(高速液体クロマトグラフ付き前処理装置)を装備した安定同位体比質量分析計 delta V の計 3 台。

琵琶湖観測船: 高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地(下阪本)に係留されている。

シンバイオトロン: ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園: センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池

があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係: 工藤

安定同位体関係: 陀安

観測船関係: 小坂橋

シンバイオトロン関係: 奥田

実験圃場林園関係: 大園

8. 協議委員会、運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

平成 24 年度 共同研究・研究集会・WS 採択申請一覧

研究代表者	所属	申込内容	研究課題
近藤竜二	福井県立大学・海洋生物資源学部	共同研究a	琵琶湖水中の超微小細菌の分子生態学的研究
高野宏平	総合地球環境学研究所・研究部	共同研究a	クワズイモが送粉者タロイモショウジョウバエに与える報酬物質の成分および生態的役割の解明
伴 修平	滋賀県立大学・環境科学部	共同研究a	琵琶湖食物網における水銀の生物濃縮過程の解明
仲澤剛史	国立臺灣大学・海洋研究所	共同研究a	繁殖期におけるイサザの空間的な遺伝構造の解析
三田村緒佐武	滋賀大学・教育学部	共同研究a	琵琶湖北湖における溶存化学成分の分布特性の解析
西田周平	東京大学・大気海洋研究所	共同研究a	安定同位体比を指標とした動物プランクトン群集における食物網の解析
湊 秋作	関西学院大学・教育学部	共同研究a	ヤマネを核とする食物連鎖の解明から森林の生物多様性保全策の提言へ
田中健太	筑波大学・生命環境科学研究科 普平高原実験センター	共同研究a	シロイヌナズナ属野生種の標高への適応進化の遺伝的機構: 移植実験による遺伝子適応度の実測
Rey D. S. Papa	Department of Biological Sciences and Research Center for the Natural Sciences, University of Santo Tomas	共同研究a	The Intestinal Parasitofauna of Fish from Three Major Aquaculture Lakes in Luzon Is., Philippines – Diversity, Ecology, Systematics and Indicators of Ecosystem Health
近藤竜二	福井県立大学・海洋生物資源学部	研究集会/ワークショップ	International Workshop on Biogeochemical Cycling and Microbial Ecology for Young Scientists
難波利幸	大阪府立大学・理学系研究科	研究集会/ワークショップ	Advances in Theory of Species Interactions: Linking Individual Behavior, Population Processes and Community Dynamics
陀安一郎	京都大学・生態学研究センター	研究集会/ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ2012
奥田 昇	京都大学・生態学研究センター	研究集会/ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曾川 Summer program for young ecologists: long-term monitoring in Kiso River
島野智之	宮城教育大学・環境教育実践研究センター	研究集会/ワークショップ	陸上生態系における土壌節足動物の調査法およびその評価について

■ センター関係者の動き ■

- 1) 中国科学院水生生物研究所の Li Renhui 氏が、外国人研究員(客員教授)として、1月1日から3月31日まで滞在されました。
- 2) スロバキア科学アカデミー植物学研究所の Karol Marhold 氏が、外国人研究員(客員教授)として、4月1日から6月30日までの予定で滞在中です。
- 3) 京都大学理学研究科の有村源一郎特定准教授が、4月1日付けでセンターの准教授として着任しました。
- 4) 平成 24 年度の研究員(研究機関)は程木義邦氏、米谷衣代氏、由水千景氏の 3 名です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトにて申込フォーム有り）。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費 ***	正会員 (一般会員)	11,000	13,000	5,000
	正会員 (学生会員)	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については冊子を必要としない会員への割引(ER 900 円、生態誌 600 円)を行っています。すでに会員の方が今後申請される場合は2013年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

*** 生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費を学生会員と同額にする措置を実施します。詳細はウェブサイトをご覧ください。

地区会費

正会員は、住所(所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう)により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区 (200 円)：北海道
- ・東北地区 (800 円)：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区 (600 円)：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区 (0 円)：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区 (400 円)：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区 (400 円)：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区 (700 円)：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250

<http://www.esj.ne.jp/>

※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。